



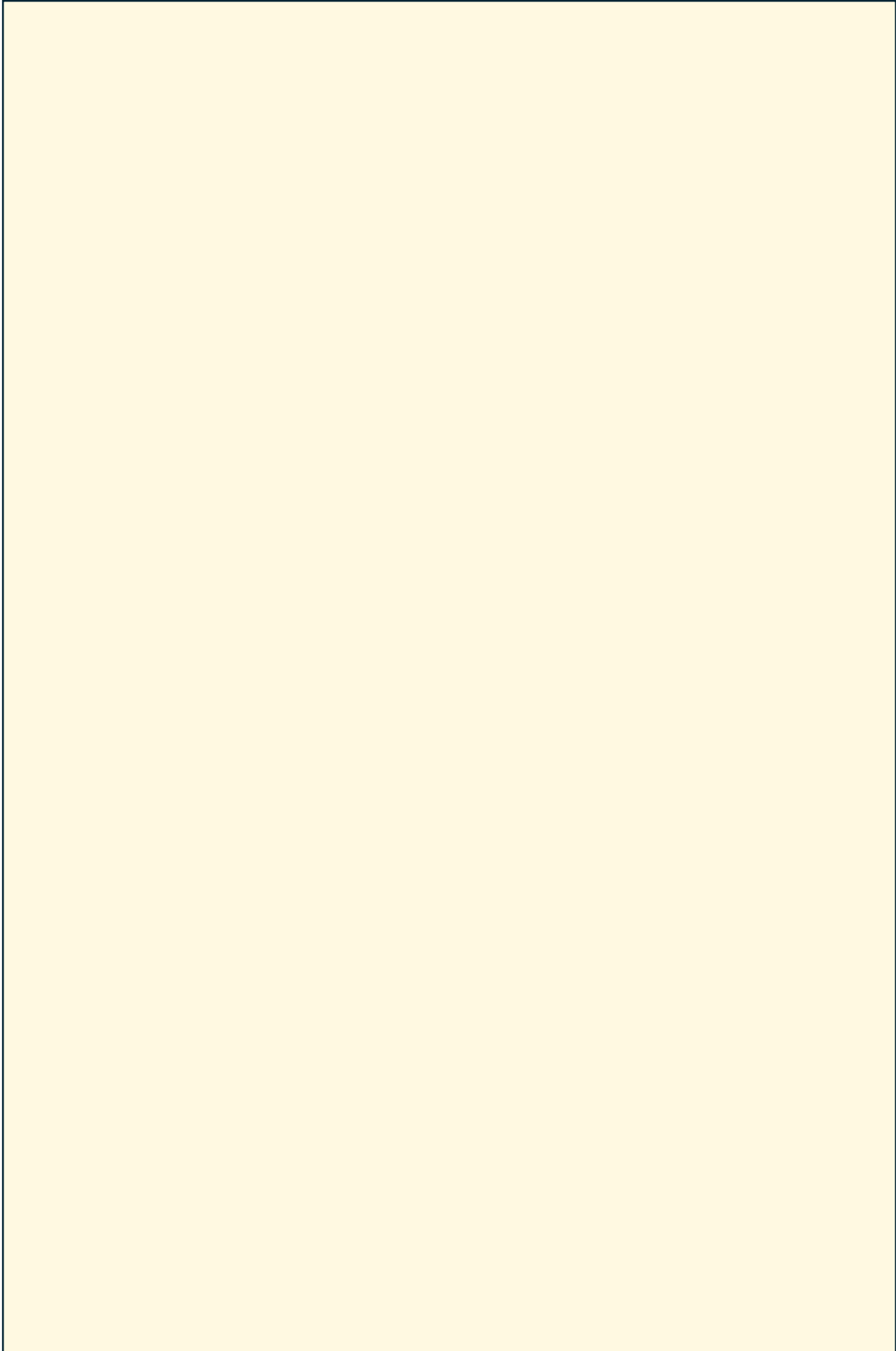
(大田洋子 1950年代、書齋で)

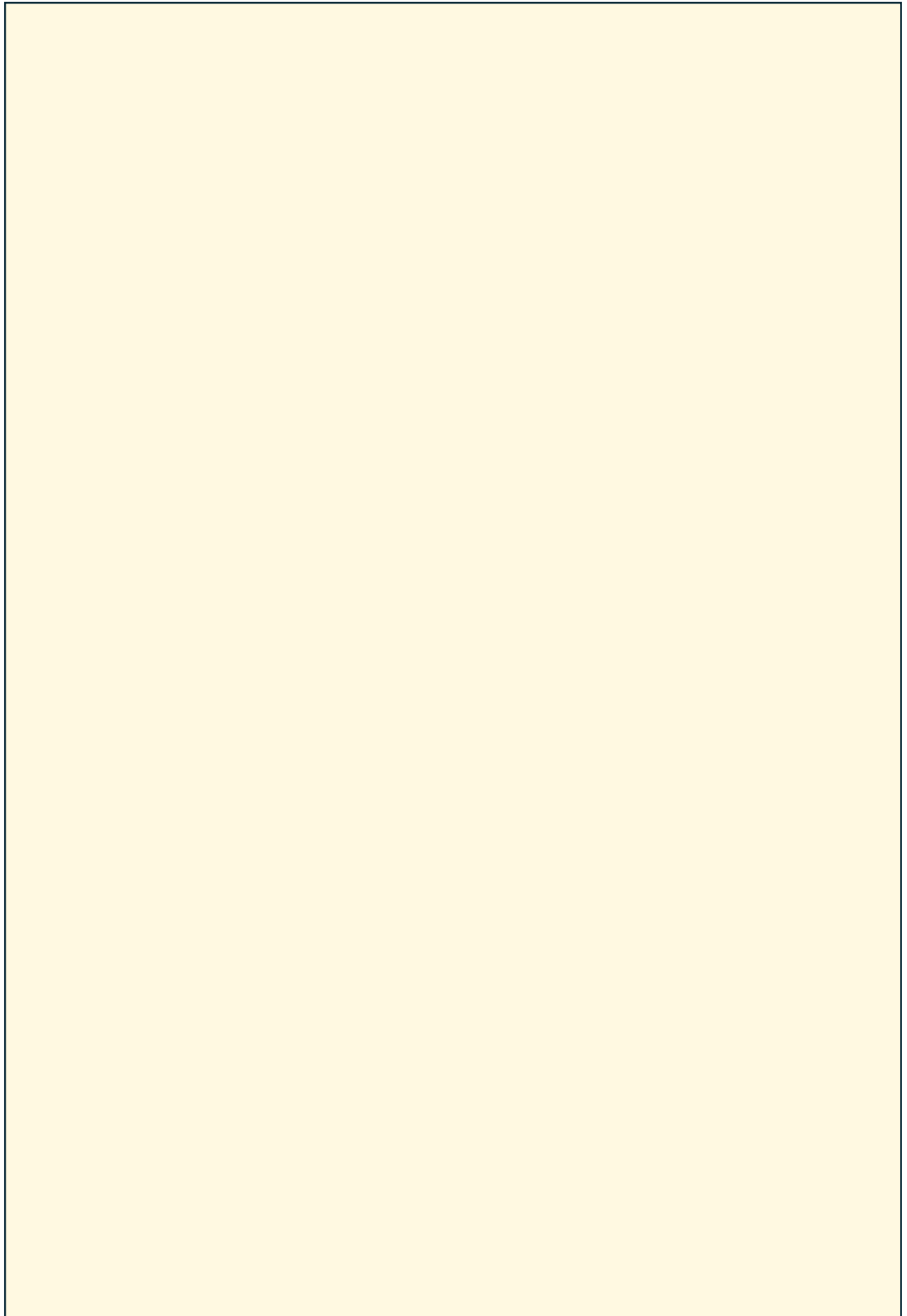
壮絶な葛藤の中

綴った原爆文学を辿る

大田洋子 年譜

江刺昭子（ノンフィクション作家）





まえがき

原爆文学の代表的な書き手である大田洋子（一九〇三〜一九六三）の作家活動は、いまだその全貌が明らかではない。戦後八〇年にあたる今年、代表作『屍の街』と『夕風の街と人と』の文庫本が出版されたが、他の著作は手軽に読める状態にはない。そのことが四〇年に及ぶ文業にふさわしい評価を妨げているのではないかと思ひ、生涯と作家活動を一望できる年譜作りを試みた。

大田の作家活動は振幅が大きい。

一 十代で地元新聞に「闊秀作家」として派手に扱われた文学的出発期。
二 『女人芸術』で文壇デビューしたものの、目立つのは小説作品より、随筆、コント、座談会での発言など。多作だが実り少ない停滞期。
三 再起をかけた『流離の岸』が好評で、続けて『海女』と『桜の国』が懸賞一等になり脚光を浴びた。戦時下に単行本九冊を出した流行作家期。

四 『屍の街』『人間檻樓』『半人間』『夕

風の街と人と』など、原爆体験者として被爆とその後の実態を詳らかにした文学的証言が一定の評価を得た原爆作家期。同時に夢のように美しい少女小説の世界にも棲んだ。

五 原爆作家という呼称を嫌い、原爆を中心テーマにすることに距離を置いた。老人文学の先駆として『八十歳』が注目されたが、発表舞台に恵まれなかった晩年寡作期。

年譜を編みながら大きく五期に分けてみたが、屈折の多い私生活が作品に影響していることがわかる。複雑な家庭環境で育ち、籍は移していないが三度の結婚はいずれも短期間で終わった。からだの不調を抱えながら生活に困窮した時期も長い。

胸を打たれるのは、文壇やジャーナリズムに派手に迎えられた時期と、冷遇といってもよい時期が交互に訪れながら、決して書くことを手放さなかった強靱な作家魂である。女性進出が叫ばれた時代から、一五年戦争の激動

期を生き抜き、作家としての地位を安定させたものの、原爆に被爆するという未曾有のできごとで巻き込まれた。その残酷さを伝えるべく、ペンで立ち向かったものの、伝わらないもどかしさに絶望した。

なお、本年譜では詳しく触れていないが、占領軍の言論弾圧の下で、原爆の惨状を記録しようと、あの手この手を試みたことは、大田特有の抵抗精神の表れである（プレスコードについては、拙著『歴史を拓いた女たち 人物で読むジェンダー史』に詳述したので参照されたい）。

拙速な作業で、洩れている作品、誤記も少なからずあると思うが、これを基にしてさらに詳細な年譜が編まれることを願う。そうして、大田の生涯と創作活動の全貌が明らかになるとともに、彼女が全身全霊を傾けた原爆文学が多くの読者を得ることを期待したい。戦争体験が後景に退いた今、彼女が希求した核兵器なき世界に近づく一歩になるはずだから。

凡例

年譜は三段組みとし、一段目に既存の年譜を踏襲しながら、その後に判明した動静や経歴、二段目に著作、三段目に資料を記した。

著作年譜は、初出作品、単行本や文庫本、文学選集や再録類の順で、初出作品以外は太字にした。

三段目の資料は、大田の生涯と作品の理解を助けるためのもので、大田の著作および、他の作家や評論家の評言や感想、新聞雑誌記事の一部抜粋である。また、作成者のわたしが『草體評伝大田洋子』（一九七一年刊）の執筆前後に関係者を訪ねて聞いた談話、問い合わせた手紙に対する返事などからも適宜抜粋した。抜粋であるため、充分に意を伝えられないところがあるが、ご容赦いただきたい。

没後の刊行物は欄外に、本年譜を作成するにあたって参考にした主な文献は末尾にあげた。

（江刺昭子）

<p>履 歴</p>	<p>1903 (明治36) 年 11月20日、広島県山県郡原村大字中原一四〇六番地の一で生まれた(現、北広島町)。切串小学校所蔵の大田自筆の履歴書には、出生地は広島市西地方町とある。本名初子。父福田瀧次郎、母トミの長女。父瀧次郎は、1878年生まれで広島県山県郡原村の中農地主。 母トミは1877年生まれで、横山種次とツルの三女。20歳頃、20歳年上の官吏小泉金八と結婚し、長女清子をもうけたが離婚。24、25歳頃、福田瀧次郎と結婚した。</p> <p>1905 (明治38) 年 2歳 6月26日、弟の久が生まれる。</p> <p>1907 (明治40) 年 4歳 1月9日、父瀧次郎がトミとの婚姻を届出。3月27日、瀧次郎が初子(洋子)を認知、届出、福田家に入籍する。</p>
<p>作品年譜(初出・著書・文学選集と再録類)</p>	
<p>資 料</p>	<p>福田久(弟)談 「親父の福田瀧次郎は、原村中原の豪農だが気まま者で、広島市に出て散財したりして借金ができ、内緒で山を売り田を売って母親は面白くない。別れて資産を弟の福田耕作に譲り、わたしは耕作に預けられた。それから親父は山口県で土木建築の請負業をやっていた。親父は頭の切れる人で、達筆で、親分肌のところがあって遊んでいた人ですね」(1970年9月)</p> <p>大田哲(従弟)の手紙 「大田幸助・カメは私の祖父・祖母である。私の父寅松の妹が洋子(初子)の母トミである。トミが福田に嫁入って生れたのが初子である。福田は当時のモダン青年で家業をかへりみないので(写真にコッていたといふ事だ)。私の祖父幸助が見かねて初子とともにトミを引きとった。私の祖父幸助は私も覚えていたが相当の頑固者だった様に思ふ。トミは其の後稲井穂十の後妻になり、初子は大田家に入籍した。初子は大田の姓のまゝ稲井家で成長した。其の間の色々の苦労はあったと思ふ。稲井氏はよく私の家に来て、私の父と共に酒をのんでいたのを覚えている。初子が広島市の女学校を卒業して代用教員や県庁に勤めたりした当時、私は中学生だったので初子の下宿でめん</p>

1908 (明治41) 年 5歳

3月29日、弟の二三が生まれる。

1910 (明治43) 年 7歳

この年、両親の離婚により初子は父と別れ、母トミとともに山県郡都谷村 (現、豊平町) の横山家に住む。

4月、都谷村の尋常高等小学校に入学する。

12月28日、広島県山県郡津浪村一九五番屋敷 (のち、加計町) の大田幸助 (1840年生まれ) ・カメ (1845年生まれ) 夫妻の養女になる。

1911 (明治44) 年 8歳

2月、弟の二三が山県郡原村の森田彌吉の養子になる。

1912 (明治45) 年 9歳

この年、母トミが広島県佐伯郡玖島村一四六番屋敷の稲井穂十 (1882年生まれ) と結婚する。

初子は祖母横山ツルと暮らしていたが、祖母は厳格な人で、遊ぶことは厳しく戒められ、学校以外には外に出してもらえず、しばしばお寺参りに連れて行かれた。

まもなく母の再婚先の稲井家に引き取られる。穂十も再婚である。先妻サトとのあいだに鉄操・鉄鳴の兄弟があり、兄は喧嘩腰の強い人で、トミを母と呼ばず、洋子とも仲が悪かったという。

どうを見てもらった。其の頃から又大田家とのつき合いが深くなった。それは祖父、祖母が他界したからだと思ふ。つまり世代が変わったからだ (江刺昭子宛、1971年3月27日)

大田洋子「思ひ出の手帖」

「(母は) お茶や生花やお裁縫を教へて暮してゐたが、祖母の感化でぶらぶら手を遊ばしておくことをきらひ、さしむき必要でないものを次々に織つてゐた。(略) 私は母が白い土蔵の中で、いつも同じやうな『縞帳』をひらいて、変り栄へもしない縞柄の思案に耽つてゐた姿を思ひ出す。そしてそのやうな追憶を持つてゐることを幸せだと思つてゐる」 (『文芸情報』1942年1月)

大田洋子「祖母と涙と」

「毎年八月になると、大田川と云ふ大川の上流にある大田と云ふ伯母の家から生きたまゝの鮎と、うるかとを届けて来るのだつた。伯母の家では大田川に築を持つてゐて、季節に入るとおびたゞしい鮎を捕るのだつた。(略)

十一の時母は私を祖母に預けておいて十里離れた村に再婚して行つたが青白い夕暮、私は橋のたもとの鍛冶屋の前に立つて嫁いでゆく母を見送つた。薄紫の袴の上に黒い縮緬の羽織を着て人力車に乗り、母は川に添つた長い道路を山陰に消えて行つた。私は冷く澄んだ悲劇を感じ、そこ

4月、佐伯郡玖島尋常高等小学校尋常科に転校。

1913 (大正2)年 10歳

3月6日、穂十とトミのあいだに妹の雪枝が生まれる。

1916 (大正5)年 13歳

3月、玖島尋常高等小学校尋常科を卒業。稲井穂十は文学好きの読書家で、土蔵には多量の蔵書があった。洋子は土蔵にこもってハイネ詩集、ゲーテ詩集、島崎藤村、田山花袋、田村俊子など手当たりしだいに読み、田村俊子のような作家になりたいと思う。
妹の礼子が生まれる。

1917 (大正6)年 14歳

8月19日、祖母横山ツル死去。

1918 (大正7)年 15歳

3月、玖島尋常高等小学校高等科を卒業。
4月、広島市進徳実科高等女学校本科に入学。最初は寄宿舎に入ったが、浄土真宗系の女学校なので、毎朝礼拝堂で読経をさせられ窮屈だった。のち母の姪大田玉子宅から通学する。
テニスをし、オルガンや琴を習い、ぶらぶらと暮し、ひそかに芸術への夢を育てた。



女学校時代

には母でなく、一人の若々しい女を見出した。私がこの世でたゞ一度怨恨といふものを知つたとすれば、それは母の姿が、真新しい、女となって山陰に消えた瞬間であらう。(略)

十五の秋祖母は亡くなつた。生前彼女は私のために楮紙の紙縵をいろんな美しい色に染めて、それを織機にかけて布を織り、雨ゴートに仕立て、呉れてゐたが、母の婚家先へ私が連れられて行つたのは雨が降り、その美しい雨ゴートを着て十里の道を人力車に揺られた。

その頃はもう都会の女学校の寄宿舎にゐたが、休暇に義父の家に帰つても、母の姿は私のものではなく、私は暗い土蔵の中に入り、終日本ばかり読んでゐた。その土蔵の灰いろの壁には多分私の涙のしみが無数に残つてゐることだらう。私は泣いて泣いた。その涙からは無限に、夢と反逆が生まれた」『女人芸術』1932年1月)

大田洋子「愛するふるさと」

「私は広島市の生れではない。広島県の北の郡部の、雪のふかい山村に生れ育つた。田舎生れのせいか、それともそういう気質なのか、若いときも現在も、田舎好きである。外国への旅行を夢見るときにさえも、私は田舎の風物と人間にあこがれる。女学校の寄宿舎にはいるまで、田舎にいて、広島はよく知らなかった。山村の地主の家で、文学青年風や文学少女風の親類縁者が多かつ

1919 (大正8)年 16歳
4月8日、妹の一枝が生まれる。

1920 (大正9)年 17歳

3月、広島市進徳実科高等学校本科を卒業。

4月、広島市進徳実科女学校研究科に入學。

10月15日、養父大田幸助死去。

1921 (大正10)年 18歳

3月、広島市進徳女学校研究科を卒業。

この頃から短歌や詩を新聞に投稿する。

1922 (大正11)年 19歳

11月、広島県安芸郡江田島村切串補習学校の裁縫教師になる。月報30円。同村の大川宅に下宿し、昼は学校で教え、ときにマンドリンを奏で、夜は小説を書くことに専心して、地元紙の『芸備日日新聞』などに投稿する。稲井家一族は文芸に秀でており、「一家三人が歌を書きましてね。芸備日日に『天、地、人』と選があつたでしょ。私のが『地』に入り、叔父が佳作に、おしまいの方に母の妹が入選したりして」と語っている(『中国新聞』1953年10月22日)。

11月、無試験検定により小学校専科正教員の免許状を受ける。

ここで、戦後結婚する寛中静雄と出会っている。大田は寛中ら中学生の憧れの的だった。



江田島の教師時代

たため、早くから自然に手にふれ次第の本をよみ、作家の道を進むという、こんにちの運命をもった」(『愛するふるさと』『暮しの手帖』1953年9月)

大田洋子「囚人のごとく」

「時々猿も出るといふ山村から、町の女学校へ移った私に、私の描いた美しい自由は訪れなかつた。私の求めた自由とは、放逸にやりたい放題をやりたいたいと云ふ希みではないのだ。(略)私はテニスをしたりオルガンを弾いたり、お琴を習つたりして、ぶらぶらと暮した。(略)つまり私は自分の中に避けがたい特殊性を発見したのであった。家の中や土蔵にある文学書を休暇の度に幾度も読み耽つた結果と、静寂な環境と、夢多き性格とが執拗に結びついて、私はつひに芸術への夢を至上のものとして心に抱ひてゐることに気づいた。するとあらゆるものが詩に見え、音楽として聞え、絵のやうにきれいであつた。私は幸福だつた。ぎざぎざに分裂した心の生活に一筋の光がさし、やがて統一された。女学校にゐる内に、私の書いた詩や短篇が町の新聞の文芸欄に載つた。音楽の先生や、新聞の文芸記者が、私に宝塚か新劇の女優になることをすすめたが、私は自分の中にさう云ふ素質のないことよく知つてゐた」(『婦人公論』1940年4月)

1923 (大正12)年 20歳

1月1日、『芸備日日新聞』編集長の西川芳溪は若い女性作家を育てたかったのだろうか、元旦の一面を「広島之二閨秀作家」として、大田の短篇小説「悩める人々」と親友の佐伯綾子の「隔り行きつゝ」で埋めた。「悩める人々」は、大田19歳の創作で、島が舞台で男女の恋愛がテーマ。以後、異例の扱いで次々と小説を発表する。

3月8日からは連載小説「或る一群」を八二回連載。やはり舞台は島の学校で、女教師が二人の男性の間で揺れ動く心理を追うなど、男女の愛憎をテーマにしている。

5月27日、『或る一群』に就いて「で、「連載中の創作について「周囲の一部が、随分事実化するので、私もうんざりして筆がすくんで仕舞ひました」「小学校などの今の生活では、何だか思ひ切った作品を発表する事が出来なくなりました」と書いている。

9月30日、切串補習学校を退職。

1923 (大正12)年

1月1日、「悩める人々」『芸備日日新聞』

3月8日〜6月29日、(八二回連載)「或る一群」

『芸備日日新聞』

5月13日、詩「南の島より」『芸備日日新聞』

5月27日、『或る一群』に就いて『芸備日日新聞』

8月3日〜七回連載、「或る少年の気持」『芸備日日新聞』



『芸備日日新聞』1923年1月1日

大川光代(江田島の下宿先の主婦)談

「うちのおじいさん(舅)が人の世話が好きでいつも誰かかれか学校の先生が座敷におられましたがのう(下宿の意味)。大田先生は学校から帰られたら、よう書きようられましたが、いっしょうけんめい書いて、そこいらじゅうほうぐ(反故)がころがつちよりましたなあ。わたしが話したいろんな話なんかを中国新聞なんかにか書かれておりました。きれいな方じゃったから若いもんに人気がありましたなあ。夜になると、島の若い衆がオーサマ、オーサマいうて屋敷のまわりをまわつちよりました。ハイカラな先生での、ときどきマンドリンを弾いちよられました。」(1970年8月)

名木美子(友人)談

「わたしの主人が熊平金庫のタイプの先生で、教室は店の角で一〇人位。わたしの家が白島で大田さんは饒津の里に下宿していました。川村さんとわたしは宇品の糧秣廠に、大田さんは県庁の秘書課のタイピストになった。その頃わたしと川村さんがモデルの『彼女たち』という小説を『広島女流作家選集』に書いた。わたしのお針の先生のところは大田さんがピンクのバラの模様の着物を縫いに出して、まだ衿裏がくけてないのを、安全ピンで留めて着ていたこともあります。わたしが帯にするようなローズ色の濃淡の着物を着ておられ

1924 (大正13) 年 21歳

1月から4月まで、広島市内熊平金庫の和文タイプライター教室に通う。広島県庁の内務部知事官房課にタイピストとして勤める。女性の事務職は珍しい時代で、同僚タイピストに吉田美千子がおり、新聞に「県庁に梅の花が二輪咲いた」と書かれた。

前年に続き、『芸備日日新聞』に小説や随筆を発表する。

市内の新劇グループ「十一人座」に所属して、ルナル『にんじん』の主役を演じている。のちに「原爆の図」を描く丸木位里(1901年生まれ)が27年から30年頃、十一人座の公演に参加して「村から村を涉り歩いた」(『丸木位里画文集流々遍歴』)というが、二人が会っていたかどうかは不明。

10月、チウリップ社から『女流作家選集』が出版され、大田の創作「彼女たち」など一四人の女性の作品が収録された。大田の作品が初めて本になったことになる。

1925 (大正14) 年 22歳

この頃、広島市二葉の里の義父穂十の叔父にあたる柴田重暉宅に寄寓。
大手町で合屋正登・こずえ夫妻が経営していたカフェ「夢二」に出入り。関東大震災を逃れた社会主義者の高津正道と妻葵いつ子が無産者同盟を

1924 (大正13) 年

2月4日～11日、「二人の憂鬱」『芸備日日新聞』
10月1日・2日、『広島女流作家選集』について(上・下)『芸備日日新聞』

10月10日、「彼女たち」『広島女流作家選集』チウリップ社



友人たちと、前列右端大田洋子、1924年

たこともありま。県庁では皆、紫の袴でしたが、大田さんははかなかった。ハイカラさんでしたね(1971年3月)

大田洋子『広島女流作家選集』について

「とまれ広島女流作家選集は、私達の目の前に堂々と出て来たものである。出版者安留氏が、唯一人であれだけの事業を為し遂げて呉れたことは、私達に取つての無上の感激である。(略)

今度私教へられることがたくさんあった。

作品を発表するときに、私はその内容に付いて随分臆病なことを考へたりした。うちの者たちの手前や、知人たちの思惑を気にしたりし恋愛を描くのは恥しかったりしたものである。のび上らうとする色んな気持だ。そんな風な事から抹消したことのあるのはあつけないことである。そんな風な一切の遠慮を私は捨てるであらう」(『芸備日日新聞』1924年10月1日、2日)

小野勝(藤田一士の友人)の手紙

「生活は哀れなもので、私はバイトで若干の下宿代を払う有様だったが、洋子のヒステリーはまことに激しく、自分の金で食べ物を買って来て子供にも誰にも与えず、時には夜半硝子戸を叩きながら『ここはお国を何百里…』の軍歌を唄ったり、まことに手におえず、私は柴田重暉のところへ洋子の引き取り方を頼みに行ったりした。(略) 赤ん

作ろうとして、周辺に若者が集っていた。呉から大谷藤子も来ていた。大阪毎日新聞記者の藤田一士と大田もその仲間で、藤田が大田を見初めた。藤田と大田は柴田の家で両親や親戚も同席して結婚式を挙げ、同市中島町のカフェ「ブラジル」で洋食による披露宴を開いた。

藤田は別の女性との関係が問題になって大阪毎日を退き、その推薦で小野勝が新聞社に勤めた。藤田には妻子があり、妻千里は三人の子を藤田の元において大阪で幼稚園保育になった。藤田は歯科医の免許をとり技工士を雇って金谷町で開業したが、医院は患者が来ないため生活が成り立たず、夫婦喧嘩が絶えなかった。小野勝が一時同居した。

1926 (大正15・昭和元年) 23歳

この年、大田は藤田一士と別れて上京し、菊池寛の秘書になる。芥川龍之介や里見弴宅へ『文芸春秋』の原稿を貰いに行ったりした。当時、永井龍男が文芸春秋社におり、永井と若い男女が写った写真で大田の首にかけた紐を永井が手にしている。永井のいたずら書きだという『永井龍男―最後の鎌倉文士』かまくら春秋社)。



前列左から二人目の男性が永井龍男、一人おいて大田洋子『永井龍男―最後の鎌倉文士』かまくら春秋社)

坊は一か月余りおじやの上ずみやあちこちで貰って来るミルクなどで育てているうち、私は市へ転職することになって藤田との同居を打ち切り、間もなく嬰兒は子のない記者のUに貰われた」(江刺昭子宛、1978年10月23日)

藤田年良(藤田一士の長男)談

「三人きょうだいで、わしと弟、妹のゆめ。人はいろいろ言うてじやが、洋子はわしらにはええおふくろじやった。なんであがにおやじと喧嘩ばかりせにやあならんのか、わしらにはわからんかった」(1975年5月13日)

大田洋子「婦人記者だったわけではない」

「亡くなった菊池寛氏に京都で会ったとき、東京に行きたいと相談した私に、『僕がどこの社にでも入れてあげるから、一年ほど婦人記者をして東京を知ったり言葉を覚えたりしてはどうです』と云われ、そういうものかと思つて、その気になった。ロマンティックな苦しい問題のため、窒息しそうになつていたときだった。菊池氏にもらった五十円という大金の旅費の半分を、京都でわかれをした相手に残して、泣き泣き汽車に乗って上京した。約二十年前で田舎の小娘であった。広島では自分をいっばしの少女と思つていたが、東京に来て見たら、婦人記者の見習いにもなれそうになかった。菊池氏にうちにいらつしやいと云われる

1928 (昭和3)年 25歳

1月、玖島の稲井家で男児を出産し、子は藤田の家に届けられた。間もなく友人で、子のない新聞記者に貰われた。記者は広島日日新聞記者で、のち大阪日日に転じた。

大田は合屋正登・こずえ夫妻を頼って大阪に行く。合屋夫妻は、大阪と広島を行き来しつつ、カフェを経営しており、大田は女給をしながら小説を書き、中央の雑誌に投稿する。

1929 (昭和4)年 26歳

6月、「聖母のゐる黄昏」が『女人芸術』に採用され、文壇的処女作になる。障害のある島の娘が医師の男に騙されて妊娠し、中絶を拒んで子を産む。男の意のままにならない女性の姿は、その後の作品につながる。以後、同誌を舞台に作品を発表する。

8月、『女人芸術』に「略歴」を発表しているが、事実と異なる記述が含まれる。

10月12日、大阪女人芸術支部が結成され、大田も会員になる。発会式および講演会を土佐堀実業会館で開催。東京本部から望月百合子、八木秋子、林芙美子、松村喬子が講演にきた。



『女人芸術』創刊号 (1928年7月)

1929 (昭和4)年

6月1日、「聖母のゐる黄昏」『女人芸術』

8月1日、「略歴」『女人芸術』

9月1日、「インチの傷痕(コント)」『女人芸術』

10月1日、「華やかな危機」『女人芸術』

10月、「ノラの死」『前衛時代』

11月1日、「ピラマキ」『女人芸術』



「略歴」『女人芸術』 (1929年8月)

まゝ、雑司ガ谷のあの有名な文芸春秋社に居候をしていた。後に菊池氏が私を女として見るようになって喧嘩をしたが、ずいぶんいじめられ出したのに、ほかへ出て下宿でもするということはてんで知らなかった。(略)

ろくに何もしないのに、社員という名目で月給二十円もらった。住込んでいるのだから大そうたくさんの気がして、これでもいいのかと考えたりした。菊池氏が戯曲を口でしゃべるのを筆記したりすると、それだけで二十円も下さるので、薄気味わるくて返したりした。だいたい職業婦人となって独立しようなどと、はっきり意識していたわけではなかった。別れねばならぬひとにわかれるために逃げて来たのが主な理由だったから。(『婦人公論』1952年2月)

大田洋子『流離の岸』

「深瀬から離れやうともがく自分の本当の心の底が彼女はやつと覗けた気がした。道徳感から来てゐる精神などであるものか。良心の呵責でもない。もつと利己的なものなのだ。深瀬との結婚生活に及ぼす自分自体の損失、煩わしさ、世間態、分裂する相手の愛、楽しみの少なさ。そのやうな損害の見積り高が千穂をして深瀬から去らせ、一人の井上千穂として生きやうとさせてゐるのだ。若い身を歪んだ生活の中へ沈めきりにするのが彼女は惜しいのだ」(『流離の岸』1939年)

1930 (昭5) 年 27歳

5月頃、『女人芸術』主宰者長谷川時雨の勧めで上京し、本郷の蓬莱町で生花の先生をしている家に下宿する。「囚人の如く」(『婦人公論』1940年4月)には1932年に上京したとあり、しばらくは大阪と東京を行き来していたとみられる。

この頃、大滝重直が新宿弁天町の生田春月宅を訪ねたところ、大田と矢田津世子に紹介された。春月の妻の花世が『女人芸術』で若い人の面倒を見ていたからだ。生田家を三人で辞し、「神楽坂の坂の上の丁字路で真紅の洋装の大田洋子さんと別れた」と書いているから、断髪、洋装のモダンガールだったのだろう。戦時中にも大田と大滝は親しく行き来した様子が大滝宛大田の手紙からわかる(大滝重直『ひとびとの星座 回想の文学者たち』国書刊行会)

1930 (昭和5) 年

2月1日、「朱い訪問着」『女人芸術』
3月1日、「検束のある小説」『女人芸術』
8月1日、「女を連れに行ったルミ」『女人芸術』
10月1日、「火群」『女人芸術』



大阪女人連盟(前列右から3番目大田洋子)、1930年

大田洋子自筆「年譜」

「道徳的に耐へがたい思ひにかられてその家を出た。大阪の新聞記者夫妻の酒場に隠れてゐて、自宅の方で数年ぶりに本を読みはじめた。時代は変つてゐた。二月の深夜に火鉢もおかず、マルクスをよみ、資本論を読んだ。心は幾たびか傾斜したが、性格的に肉体的に、その困難な潮流にはついて行けなかつた」(『昭和文学全集53巻』)

大田洋子「略歴」

「広島に生れ、私立の高等女学校を、十一年に出ました。それから明くる年、高師を受けたのですが、入れませんでしたので其の年いつばい、江田島の小学校へ勤めました。六月号へ載せて頂いた『聖母のゐる黄昏』は、此の島の風景の思ひ出へ、幻想を掛たものなのでございます。その頃、広島中国新聞や、芸備日日新聞の文芸欄へ、歌や、詩や、小説を書きました。

一五年春から、暫くの間、文芸春秋社で、菊池先生の御厄介になりましたが、病氣して帰郷いたしました。それから現在までは、心にもなき放浪の生活を続けております。どんな生活をしてゐる時でも、私には此の生活が目的ではなく、絶へず、心に燃えて動かないものは、芸術に対する、夢と、憧憬だけでございます」(『女人芸術』1929年8月)

1931(昭和6)年 28歳

この年、新宿上落合二丁目五四五番地の梅田材木店の二階に間借りする(1933年という記述もある)。落合には女人芸術のメンバーがおおぜい住んでおり、彼女たちに誘われたのだろう。中井駅前で開業する辻山医院の辻山義光の妻の辻山春子、下落合に真杉静枝、矢田津世子、田島準子、上落合に林芙美子、尾崎翠ら。近くには横光利一や片岡鉄兵の住まいもあった。
8月、作家同盟の作品研究会の傍聴を松田解子を通じて江口渙に頼む。



『女人芸術』の仲間、右から林芙美子、辻山春子、大田洋子、1930年頃

1931(昭和6)年

- 2月1日、「変色」短編集の「」『女人芸術』
- 3月29日、「酸化」『都新聞』
- 4月1日、「無明の座から」『女人芸術』
- 6月1日、「郊外の家で」(コント)『若草』
- 6月11日、「六月」『河北新報』
- 8月1日、「緑草の芽」『女人芸術』
- 8月26日、「付き纏ふ悪霊」『読売新聞』
- 8月26日、「わたしの略歴」『読売新聞』
- 9月1日、「火華開かず(その二)」『火の鳥』
- 9月29日〜10月1日、「百合夫人夜話(1)(2)(3)」『都新聞』
- 10月16日、「淫俣」『読売新聞』

大田洋子「付き纏ふ悪霊」

「私がたゞの文学少女であった頃私はロシア文学に耽溺して、劇しい愛情を持つてゐた。そして自分で小説らしいものを書くやうになると、チエホフの『ねむい頭』や、『牡蠣』又、ゴーゴリの短篇などから受けた影響が、それは真似ではなく、作品の上に熱のやうに滲み出た。私はそう云ふものを、昭和四年頃からの女人芸術其の他へ書いた。すると初めは多少、甘やかされたやうな批評を受けたけれど、女人芸術がどうやら色彩的な傾向を示し初めると、読者の投書原稿の中に、私の小説をひどくやつつけたのがある。(略)私は今となつて芸術至上主義の小説を書く夢は持つてゐない。だが私の文学的な素質は、純文学の血と骨とででつち上げられ、個人主義的な文学のキズナが悪霊のやうにからみついてゐる。私は文学形式の上で、そこを闘ひ抜けてゐない。時に高踏的な水水しいロマンチックな宝玉のやうな貧乏小説を書いて見たくなる。苦いデイレンマだ。
私はその芸術的な血汐を、プロレタリア大衆小説に生かしてゆき度い。私がどんな風に文学的なプロセスを踏むとしても、ゆくところはプロレタリアートの世界を描くより外はなくなつて来る。そして又、センセイショナルな争議闘争ばかりを書くのが、プロレタリア小説のよき書き手とは云へまい。前衛の生活にだつて、個人的な性格も、心理状態もある。結婚も恋愛もある。そこには歎

1932 (昭和7)年 29歳

6月1日、「座談会 婦人新婦朝者のみてきた社会相」が「レインボー」で開かれ出席(岡本かの子・マス・ケート・森三千代・千田イルマ・千田是也・高橋鈴子・矢田津世子・長谷川時雨・熱田優子・小池みどり)。

この座談会を載せた『女人芸術』6月号(第5巻6号)が突然廃刊になる。1928年7月号から全四八冊。大田をはじめ、林芙美子、真杉静枝、田島準子ら多くの女性作家を育てながら、不況からくる打撃で購買力が落ち負債が重なったのが理由。

10月20日、「レインボー」で開かれた長谷川時雨慰労会に出席する。



『女人芸術』懇親会、長谷川時雨(右)と大田

1931年

1932 (昭和7)年

1月1日、「祖母と涙と」『女人芸術』
2月2日、「貞操を感情で扱はないー冷酷に知識的に」『読売新聞』

3月1日〜5月1日、「火華開かず(その3)(その4)(その5)」『火の鳥』

4月3日〜7日、「春と情感とー映画館の少女給仕も泣いてゐた」『国民新聞』

4月19日〜5月4日、「女流作家座談会(岡田禎子・大田洋子・吉屋信子・矢田津世子・真杉静枝・平林たい子)」『読売新聞』に出席。

5月1日、「六人目の肉体」『日本国民』
5月1日、「馬車も紫」『新潮』

5月1日、「文学的白痴」『近代生活』
5月1日、「ある身の上相談の再批判」『女人芸術』

7月1日、「十七の私」『婦人公論』
7月1日、「薔薇が散る」『婦人世界』

8月1日、「舞姫の寶石」『婦女界』
9月1日、「街の女」『婦人世界』

10月1日、「向島百花園にて」『家庭』
10月1日、「或る娘のあなくなった町」『婦人サロ

ン』
10月1日、「近頃の雑感」『火の鳥』

10月、「なア子の会ったある色魔」『犯罪科学』
11月1日、「浅草狂女落下傘(浅草風景)」『新潮』

11月1日、「秋の手紙二つ」『日本国民』

喜も苦悩もある。その解剖もやつて見たい。小市民の妻を、農民の父と母を、長屋の女房を描き、そして彼女等がどの階段を上り、どこへゆくべきかを描き度い。その世界をメスで切り開き、血のしたゝりを描かうと思ふ」(『読売新聞』1931年8月26日)



ビリニヤークと『女人芸術』談話会、1932年5月、上野精養軒、大田は前列右から六番目

1933 (昭和8)年 30歳

3月28日、義父稲井穂十、広島県佐伯郡玖島村で死去。

この頃は食べるのに困るほどで、牛込区喜久井町の稲井方、次いで中野区小滝町二八番地の大滝寮を転々する。義父穂十の弟稲井勲造の妻志げからしばしば援助を受けた。大田には叔母にあたるが、年齢は1歳上で仲がよく、一緒にボクシング見物に行つて話題になつたりした。

4月1日、リーフレット『輝ク』創刊。発行者兼編集者は長谷川時雨。発行所は女人芸術社内輝ク会。『女人芸術』を継いで、全女性の進出と連携をめざして「輝ク会」を組織した。文学者を主に画家、音楽家、芸能人、評論家、社会運動家、さらに家庭の主婦から女子学生までが集まつて発足した。『輝ク』は会員相互の親睦と消息のための機関誌で、一部五銭。会員の大田もしばしば随筆などを寄稿する。1941年8月の長谷川の死の翌々月まで続き、『女人芸術』が果たそうとしてできなかつた幅広い女性の連携の場となつた。

4月27日・28日、「女流作家座談会(林芙美子・堀寿子・大田洋子・矢田津世子・真杉静枝)」(『時事新報』)に出席。

7月10日、学芸自由同盟会創立大会が日比谷東洋軒で開かれ、創立賛成者となる。

1933 (昭和8)年

1月1日、「魔心」「火の鳥」

1月20日〜22日、「女へ」「読売新聞」

2月1日、「より少き精力で―より多くの享樂が欲しい」「近代」

3月1日、「吉行氏への手紙」「新潮」

3月1日、「素足」(春宵アヴァンチュール・コント)『婦人公論』

3月1日、「理子とあゆ」「三田文学」

4月1日、「桜吹雪のい町」「婦人世界」

4月12日、「苦い顔・甘い顔など」「読売新聞」

6月11日、「死へのローマンス」「週刊朝日」

8月、「文学少女へ贈る書」「婦人世界」

10月1日、「梨(コント)」「婦人公論」

10月14日、「恐ろしき日」「読売新聞」

11月1日、「赤い帽子」「会館芸術」

11月1日、「晩鐘を聴く」「雄弁」

11月12日、「女三態記」「週刊朝日」

11月17日、「雁来々」「輝ク」

尾崎翠「大田洋子と私」

「初めて顔を合わせたのはレインボーグレルか、で何かの会のあつた時、その日の陽気か光線の具合か集つた諸姉の顔が随分新しく見える夜だなと思つた。大田洋子も並居る佳人の一人であつた。テーブルの真前に同じように若い新鮮な顔が二つならんで、よく語り、よく食べていた。間もなく近所に越して来たといつて初対面をした。林芙美子と同伴で来訪を受けたのではないかと思ふが其辺はたしかではない。話している中に文学に対する相当な意気込みを持つて東京に來た様子が窺われ、私などの出京の仕方と思いくらべて一種の氣迫を感じさせられたものであつた。(略)

板垣直子に誘われて一度彼女の宿を訪れた。一棹の筆筒が部屋に女らしさを添えていた。彼女の記述によれば押入れが狭かつたので十四円で買ったのだそうである。今この記述を読み、あの部屋の筆筒を思い浮べて『ああそう』という懐かしさを禁じ得なかつた。昆布茶を御馳走になつて帰る時、宿の庭に張板が出ていて、張つてあるのは洋子の銘仙の着物であつた。彼女の手すさびであつたろう。その人から受ける感じに取立てて女らしさというようなものもなかつたが、この日は筆筒や張物にそれを感じて帰つたことであつた」(『日本海新聞』1956年8月26日)

1934 (昭和9)年 31歳

この年の一時期、広島市大須賀町の稲井方に帰省する。

1月、林房雄に「落魄の人々」の『文学界』掲載を頼むが、不出来で返送される。

3月17日、随筆「海辺の宿で」に近況報告。海辺の安宿に来て、地方新聞の夕刊小説を二つ書いたが生活のため、「因果な事で仕方がない。硬い壁に幾度でも額をぶつけて血を流すのも覚悟してゐるが角を折つてしまふのはいやだ」と東京での生活が困難であることをうかがわせる。



『輝ク』1934年3月17日

1934 (昭和9)年

1月1日、「永劫夢」『婦人画報』

1月1日、「モデル女」「女給」『サンデー毎日』

3月17日、随筆「海辺の宿で」『輝ク』

4月29日、「桜子」『週刊朝日』

5月1日、「私のゐる町」『三田文学』

5月、「特集 長谷川時雨プラン女人文芸 面影」『前線』(日本前線社)

9月1日、「三人組」『婦人日本』

9月17日、「伊東たより」『輝ク』

大田洋子「男といふもの」

「ものを書く道を選んで一筋になったのはすでに十八九の時分だったが、私も亦文学が何であるかもまだ分らず、本質的な勉強にまだ全身を打ち込まぬ先きに、原稿を売り初めた女作家の一人だった。

派手な場所へ舌足らずな文章と写真と、女許りの名前を宣伝ビラの色紙のやうに並べられた。多くの会へ行つた。そのやうなことを照れたり控えたり、ことはつたりしてはいけないのだと、或る人々に教へられもした。その内ばアツと、お上りの文学少女の私たちに下らぬ風評が立ちはじめた。女流作家はつまらぬことを書いて、人に惚れられて、お茶許りのんで歩いてゐる。と云ふのはまだしもだが、まるで私たちが女としての掛引きを弄してから、初めて原稿を売るのであるかのやうなゴシップがしばしば耳に入つて来た。その中でも私の噂が一番ひどいと云ふことだった。大阪のジャーナリズムの中にある友人からまで、あなたのゴシップが一等ひどくて、こゝまで伝はつて来るがどうしたのかと心配して来た。誰とかうした、あれとあゝしたと云ふ、人の名をあげての噂さだが、身に覚えがないので、私はその頃私と同じ名前の女が、もう一人あるのではあるまいかなど、本気で思つたものだ。(略)

男は女を花にたとへた。すみれ、百合、牡丹などみんな女だ。それほど女を個人として見ず、も

1935 (昭和10)年 32歳

この年、文芸雑誌『星座』創刊。石川達三、矢崎弾、北原武夫、中井正文らが同人で、創刊号に石川の芥川賞第一作となる『蒼氓』が掲載されたことと有名になった。翌年、石川に紹介されて辻村もと子とともに同人になる。

1936 (昭和11)年 33歳

2月、黒瀬忠夫と結婚。黒瀬は元改造社記者で、『新鋭文学叢書』を担当して大田を知った。改造社を誠になりダンス教師で食いつないだ。国策会社の興中公司社員になり友人の松本鶴造・清子夫妻宅で稲井勲造・志げも立ち合い簡素な結婚式。江戸川橋近くの鶴巻荘、淀橋区スハ町の西北荘、さらに幡ヶ谷の菅野宅離れに移る。子を死産。11月、吉屋信子、矢田津世子が言い出して「女流文学者会」が発足し会員になる。年会費1円50銭。事務所は吉屋宅。

1935 (昭和10)年

- 1月1日、「内外文芸作品にあらわれたあなた」の最も好きな男性・女性」「婦人文芸」
- 1月30日、「蟄居三昧」「報知新聞」
- 2月1日「素朴」「レッエンゾ」
- 2月1日〜6月1日、「月華春秋」「家庭」
- 2月1日、「奉公先より田舎の叔父へ」「暑中見舞」「婦人倶楽部附録」
- 5月1日、「良人の哀愁」「現代」
- 5月1日、「小さな感想」「早稲田」
- 6月1日、「灯」「令女界」
- 11月1日、「男といふもの」「日本評論」
- 11月17日、「檻樓いろ少女」「輝ク」
- 12月29日、「華かな危機」「週刊朝日」

1936 (昭和11)年

- 2月1日、「結婚媒介所をめぐる」「雄弁」
- 3月1日、「をんな・男・恋」「改造」
- 4月1日、「春は臍に」「日本評論」
- 5月1日、「四人」「日本評論」
- 6月1日、「赤い花束」「雄弁」
- 7月1日、「明光館とその附近」「日本評論」
- 7月26日、「悪魔にあらざ」「週刊朝日」
- 10月1日、「花より紅い」「現代」

のとして見た。女を売れのこり、棚ざらしと商品に扱った。美的観念も、男性の優位を前提として云はれてゐるのにすぎないとさへ云へると思ふ。もし方が一、男女の位置が全く反対になった社会が来た場合、これまでのあらゆる文献と云ふものが、どんなに男性本位のものだったか一驚を禁じ得ないだらう」(『日本評論』1935年11月1日)

黒瀬忠夫 (夫) の手紙

「僕が大田に惹かれたのは、一口に言えばかわい、小柄で利発な顔、ウイットやユーモアを持ち、長谷川時雨女史に見られる和服姿の着こなし、一種のあでやかさにあるようです。では、大田が僕の何処に惹かれたか？ 或は新人発掘者として多少注目されていた僕の存在、彼女に言わせると、花札の切り方が手際よく、六百ケンの名手だった点にあるようです。当時の僕は、ダンス、マージャン、玉突、飲酒―悪い遊びでは一人前以上だったのです。然し二人を結びつけた最大要因は、性を満たしあう相手を、どちらも空家で、持っていないかつたことでしょう」(江刺昭子宛、1971年6月7日)

1937 (昭和12)年 34歳

4月17日、「雪の晩」『輝ク』で、作家として妻としての生活がきしんでいる様子を短篇小説の形で吐露している。

5月、「座談会 男の貞操・女の貞操」(式場隆三郎・中條百合子・玉城肇・水町葉子・八幡美智子・平林たい子・大田洋子・吉屋信子・神近市子)に出席(『婦人文芸』)

7月7日、黒瀬忠夫との結婚生活を解消して、渋谷区幡ヶ谷笹塚一三〇番地に引越す。日中戦争開始に驚き、しばらくは何も手につかなかったが、10月に入ってまもなく、一〇年以上書こうとして書けなかった藤田一士との出会いから別れまでを私小説として書き始める。最初の日は食事もせず、一気に二七、八枚を書いた。

10月17日、「輝ク」の1ページ目には、日中戦争開始を受けて「皇軍慰問号」と刷ってあり、岡本かの子と大田洋子の文章を掲載。岡本かの子「わが将士を想ふ言葉」は「出征軍人将士となりたまふ時、日本男子に既に神なるを感じる。一体の光る。その万体の光、合して今、唐土の野に肅々と進み給ふを感じる」と勇ましい。一方、大田の「母のたより(××にて)」は、母親からの手紙形式で、出征兵士を人々がにぎやかに見送る様子や、家に宿泊した兵隊さんの世話をする戦時下の家庭の描写で冷静さを感じる。

1937 (昭和12)年

1月1日、「海いろの地獄」『婦人文芸』

2月1日、「女の窓」『星座』

2月28日、「風花は黒髪に」『週刊朝日』

4月17日、「雪の晩」『輝ク』

5月1日、「抗議 女性から男性へ」『家庭』

6月1日、「薄紫の花咲く頃」『新女苑』

9月1日、「しどろもどろ」『作品』

10月17日、「母のたより(××にて)」『輝ク』

11月17日、「嘉例の忘年会を催すべきか否か」『輝ク』

11月21日、「閨秀作家 祖国のたより 明治神宮も靖国神社も」『週刊朝日』

12月1日、「長き悪夢」『婦人公論』

矢崎弾「大田洋子氏について」

「僕は大田氏の文学的略歴にそれ程詳しいわけではない。大田氏が中央公論の懸賞募集に応じて『海女』が当選した時発表した略歴があるからこゝに披露させて貰ふ。(略)以上の様に至極あつけないものであるから、僕の想像を若干補充しよう。『女人芸術』『火の鳥』時代が氏の初期の小説修業時代であり、それから最後の雑誌『星座』に到るまでの間が、氏の文壇的修業の時代であり、今日の文学的性格が決定された貴重な期間だったのであらう。

僕は石川達三君の紹介で氏が『星座』の同人に参加されるまで、氏の小説にあまり接してはゐない。同人になられてから、僕は屢々氏の小説を乱読する機縁に恵まれたが、初期以後の文学的変遷を見ると、氏の成長はよかれ悪かれかなり急速であり、珍らしい勉強家であり、時代文壇の流れを撰取るに実に敏感な素質を具へてゐることを知った。小説的巧緻といふ点で初期と今日とは格段の進歩が見え、その精進の執拗さや深さに普通の女流作家なみではなかつたやうである。

氏の諸作をよむと、随分紆余曲折した文壇的悪影響とたゞかひもつれながらも、一般女流に稀有なよき素質をけつして破壊されてはゐないのを感じる。今日の多くの文壇的閨秀作家の間で特異な発展性が期待されるひとだと信じてゐる」(『長篇文庫』1939年6月1日)

1938 (昭和13)年 35歳

3月、実父福田瀧次郎が広島市楠木町で死去。
この年、母トミが上京して同居する。戦火が激しくなるまで手伝いの女性との三人住まいが続く。千葉県の海辺の宿に原稿用紙とペンだけを持ってこもる。ここで「ふと海に働く乙女、つまりあのたくましく張り切った海女の生活を見て、これほど思ひ、ここで『海女』八〇枚を執筆。8月、中央公論社の「事変下知識階級総動員懸賞」に応募する。

7月17日、東京朝日新聞に創立五十周年記念懸賞小説募集が発表された。「聖戦下の実状を認識し、日本人の生活母体たる家庭に力点を置きたること。締切昭和十四年二月二十八日」とある。母に「勉強するつもりで書いて見たらどう？」と勧められ、10月、母の資金援助で、小説の材料を求め、天津、北京に渡る。「桜の国」の構想をまとめて年末に帰国してまもなく執筆開始。



大田 (左) と叔母の稲井志げ、1940年頃

1938 (昭和13)年

1月1日、「紅菱」「婦人運動」
3月1日、「微笑む乙女」「婦人公論」
4月1日、「雪の山にて」「ホーム・ライン」
4月1日、「小さき島の乙女」「処女の友」
4月1日、「歌劇おもふ」「少女歌劇」
5月1日、「若草娘」「近代生活」
6月1日、「別れ―楓子の友より頼太へ―」「婦人朝日」

6月1日、「女は狂ひぬ」「モダン日本」
7月1日、「夕顔咲きぬ」「芸館芸術」
8月1日、「緑深き嚮壑」「家庭新聞」
10月1日、「月影」「ホームライン」
12月1日、「心ひとすぢ」「雄弁」



『海女』の扉の写真、1940年

大田洋子『流離の岸』について―自作を語る―

『流離の岸』は私にとって幾つかの墓碑の一つなのだ。十二年の七月は事変の始まった時だが、その七月に私は『一つの家』をこはして独りになり、小さい家を新しく持った。婆やと二人で家を持ったのが七月六日。十日頃からの新聞はいよいよ戦争の拡大を発表しはじめた。

私は戦争にびつくりした。三四年の間一つの家の幸福を計らうとして抑えに抑えた作家としての生活が『一つの家』の独りの生活の中で堰を切ったが最後、血みどろに小説の勉強をやり直すものと考へてみた私は、家の中に机の位置を決める間もなく、気分的に右往左往しなければならなかった。男であつて戦争に行ける方が救はれるのではないかと思ふほど、私は落ちつきを失ひ、計算してみた抛りどころが、根こそぎゆらめく思ひに馳り立てられて苦しかった。私の場合は作家としての形の上での生きやうが幾年間か中断してゐたため、時を得て流れ出さうとした熱と力が、その時のゆるには、まれた打撃はかなり強いものであつた」(『月刊文章』1940年6月)

1939 (昭和14)年 36歳

1月、『中央公論』が募集した「事変下知識階級総動員懸賞」の創作部門の第一席に『海女』が選ばれる。賞金五〇〇円。日中戦争開始後の1938年頃から農民文学をはじめとする生産文学や大陸文学などの国策文学が流行しており、『海女』は生産文学に分類されるが、自身の根無し草的な生活からの脱出願望もみられる。

当初、一等入選は大田と同じ広島県廿日市出身の中井正文の「神話」だったが、軍部から恋愛小説掲載自粛の通達があり、宮島の対岸を舞台にした「神話」は二等になった。この時の文芸部主任が畑中繁雄で、戦後、『屍の街』の不掲載にかかわる。2月、『桜の国』を脱稿、東京朝日新聞の懸賞に小倉緑の筆名で応募。12月20日、第一創作集『流離の岸』を小山書店より刊行。



『海女』 1940年

1939 (昭和14)年

- 1月1日、「青い帆の船」『婦人朝日』
- 1月21、22日、「合掌上下」『国民新聞』
- 2月1日、「海女」『中央公論』
- 2月1日、「ある旅の手帖より」『日本評論』
- 4月1日、「小さな想念」『水産界』
- 4月9日、「北京の夫人方」『サンデー毎日』
- 5月20日、「落第っ子」『京都帝国大学新聞』
- 5月1日、「船」『博浪沙』
- 6月1日、「星はみどりに」『日本評論』
- 6月1日、「流離の岸」『文学者』
- 6月1日、「悪の家」『長編文庫』
- 6月1日、「暗い幸福—私の文学修業を語る」『月刊文章』
- 6月1日、「お腹が空いてみたので」『会館芸術』
- 7月1日、「馬」『早稲田文学』
- 7月5日、「小さなノートより」『懸賞界』
- 7月19日、「日光の母子」『アサヒグラフ』
- 9月1日、「生ける屍—流離の岸続篇」『文学者』
- 9月1日、「旅は幸福に」『むらさき』
- 9月1日、「ピチい！」『作品』
- 9月1日、「三日間」『文芸日本』
- 10月1日、「新婚の旅」『婦人朝日』
- 10月1日、「火の虫」『新潮』
- 12月15日、「節約」『新風土』
- 10月18日、「暗い幸福—私の文学修業を語る」『わが小説修業』厚生閣

大田洋子『海女』のこと

「何のために、さまざまに、女としての幸福に背を向けて、ひたむき生きて来たか。美しい芸術の本質を突きとめたい、その故であった。けれど長い年月それに近づくかと悶え乍ら、私どもは幾度時代の火と波に打つかったことであらう。事変も私たちが苦しめる。私はその苦しみの中で『海女』を書いた。懸賞小説を書いてゐるといふ意識は少しもなく、変つた材料を生かさうと云ふ、歪んだ野心もなく、構成の面白さでこしらへやうとする、当然な成心も半ば忘れるほどの切迫した何かの思ひで、私はあれを書いたのだつた。(略)未来の永い一人の若い女が、闇のやうな外的な蹉跌に突き当たつた時、ずるずると抽象的なあがきの中へ落ち込ませずに、思索の少ない生きた生活の動きの中へ、送り届けたのが私の念願であつた。私はこの小説の中で、いたづらに腕を組んで苦惱する知識階級へ、何かを云ひたかつた。(略)だから私としてはこの作品に、海洋小説とか生産小説とかの肩書をつけて云はれるのは、以つての外で、女主人公が、働く生活によつて生きかへつたすがたを、ただ、そのやうな云ひ方でかたづけられたくはない。(略)

けれど、も一つ、重大なことを書かなくてはゐられない。『海女』はたつた八十枚の長さではあつたけれど、私は約二ヶ月の間、その小説のこと許り、夜も昼も考へ、幾度となく固くつめたものの

<p>1940 (昭和15)年 37歳</p> <p>1月、「桜の国」が『朝日新聞』の懸賞小説に一等当選し、新聞発表される。賞金一万円。</p> <p>朝日新聞は、明治期に三回、大正期に六回、昭和戦前期に三回、懸賞小説を募集し、女性作家は四人が受賞している。</p> <p>懸賞当選で有名になったせいで泥棒に入れられ、同居している母親と17歳の女中が手足を縛られて金を盗られた。以後、犬を飼い始めた。保険の勧誘員など訪ねてくる人がひきもきらず、逃げるようにして熱海の宿に滞在している。</p> <p>2月17日、「洋子さんお祝いの会」が銀座の「エーワン」で開かれた。</p> <p>5月23日、約一カ月、輝ク部隊慰問使として中国に行く。東京中央放送局教養部員黒田米子・白井鶴子・画家長谷川春子・舞踊家藤間堪園らと神戸港を出帆、蘇州、漢口、南京、鎮江、青島、上海を訪れる。飛行隊、病院、陸戦隊、砲艇隊、飛行場、軍艦、軍需部、設営班などを訪問。6月末に帰国（7月17日?）。講演と慰問の旅だが、大田の講演は文学一点ばりで、自分の立場と役割に分裂を感じ、苦しんでいる（「ある旅の終りに」）</p>	<p>10月25日、「合掌」国民新聞社学芸部編『短篇小説コンクール』砂子屋書房</p> <p>12月20日、『流離の岸』小山書店、四六判紙装函入、1円70銭</p> <p>1940 (昭和15)年</p> <p>1月1日、「遊び場」『海の銃後 第一集 輝ク部隊慰問文集』</p> <p>1月1日、「雪の晩」『輝ク部隊』</p> <p>1月2日、「懸賞小説に当選して（上）—母への愛情—」『東京朝日新聞』</p> <p>1月4日、「懸賞小説に当選して（下）—北支へ行く—」『東京朝日新聞』</p> <p>1月7日、14日合併号、「年賀慰問 文学の好きな兵隊さんへ」『週刊朝日』</p> <p>2月1日、「生きる子等」『中央公論』</p> <p>2月1日、「曼陀羅草」『婦人朝日』</p> <p>3月12日〜7月12日、「桜の国」『東京・大阪朝日新聞』</p> <p>4月1日、「囚人のごとく—桜の国—入選の折り求められて—」『婦人公論』</p> <p>4月1日、「賊」『新潮』</p> <p>4月20日、「ある日の私」『文芸情報』</p> <p>5月1日、「女が遊ぶといふこと」『ホーム・ライフ』</p> <p>5月1日、「雑沓」『文学者』</p> <p>6月1日、「桃子と真砂」『むらさき』</p>	<p>に押しつけられてゐた。書きながらも、腰がふらついてたまらない感じがし、自分が他の力に支配されて純粹でないものを直観してゐたのだつた。つまり書きたいやうに、心ゆく許り羽をのばして書けなかつたのだつた。懸賞小説を書くことは、ある意味で作家の不幸であり、悲劇であるとも思ふ。けれどこれももし自由主義的な時代に書くものであつたなら、たしかに羽は思ひきりのばせた筈であらう。書きつつどこやらへ気がねし、怖れ、憤るものを、私はどうにも避けることが出来なかつた。そして私は最高のものとか、純潔なものとか文学の本質的なものを見失つてゐるのではないかともだえもした（『暁は美しく』）</p> <p>「大田洋子さんお祝いの会」</p> <p>「本社の一万円懸賞小説に当選した大田洋子さんの祝賀を兼ねて近作『流離の岸』の出版記念会が文壇有志の発起で一七日午後六時から銀座『エーワン』で開かれた。各方面から送られた花束に埋まった大田さんを囲んで参会者五〇名ほど。中村武羅夫、長谷川時雨、今井邦子ら諸氏の祝賀と激励の挨拶があつて、同九時和やかに散会した」（『朝日新聞』1940年2月18日）</p>
---	---	---

12月30日、「春騒然」が吉屋信子編『女流作家十佳選』に収録される。巻頭に海軍省軍務局第四課の海軍中佐田代格の推薦の言葉がある。「時局いよいよ重大を加えつつある今日、銃後を飾る女性の活躍は期して待つべきものが多いが、特に女流作家の活躍こそは、大いに期待するところである」。吉屋信子、林芙美子、森田たま、大庭さち子、真杉静枝、堤千代、窪川稲子、大田洋子、美川きよ、矢田津世子の一〇作。



1940年



『桜の国』1940年

- 6月1日、「墓碑」「文芸」
- 6月1日、「白い館」「令女界」
- 6月1日、「流離の岸」について―自作を語る―『月刊文章』
- 6月1日、「早春のころ」『知性』
- 6月17日、「輝ク部隊―渡支慰問班報告その一―『輝ク』
- 7月1日、「權花」『日本評論』
- 7月、「或る日の私」『文芸情報』
- 9月1日、「誰を愛する」『若草』
- 9月1日、「哀しい人」『博浪沙』
- 9月1日、「刃向ふ街」『三田文学』
- 9月、「座談会・新生支部を語る 輝ク部隊報告（長谷川時雨・長谷川春子・大田洋子・田村房・黒田米子・山岸多嘉子）」「新女苑」
- 10月20日、「暗示の包囲を見て」『文芸情報』
- 11月1日、「二人の市長」『新風土』
- 5月1日、『海女』中央公論社、四六判紙装、1円80銭
- 10月20日、『桜の国』朝日新聞社、四六判紙装、1円70銭
- 12月30日、「春騒然」吉屋信子編『女流作家十佳選』興亜日本社

大田洋子「渦まく日本語」

「わたしはあつちでおどろきこつちで驚きしたが、天津でも北京でも、支那人の日本語には、格別驚き入った。知識人たちはさうではないが、少くとも日本人を相手に利害関係をもつ商人たちは、じつに日本語を覚へ込んでゐる。日本人が支那語で何か云ふのへ、支那人が日本語で答へてゐるのを、しばしば目撃して、おかしかつた。あるホテルの支那のボーイは、行つていらつしやいまし、お帰んなさいまし、お寒うございますね、とあまりうまく云ふので、東京に長くゐたのかと思つて訊いたら、日本へは行つたことがありません、と答へた。(略)

電話をかけるのに受話器をとつて、どきどきしながら、トン(東)と云ふと、ヒガシイ、と返つて来る。ウ・アールと云ひかけると、ゴー・ニイ・ナンバンドスカと、冷静な男の交換手の声の流れて来た。向ふがそれほど努めてゐるのだからと思ひ、そののち私は日本の発音で電話をかけた。

郵便局へ行つても、お風呂へ行つても、電車へ乗つても、あらゆるところで、支那人に日本語はとにかく通じるのである。それにしても私どもは、血をもつて戦つた皇軍の将兵の皆さんと、祖国の強大な力に、尊敬と愛情の合掌をささげないではゐられない。私は何度熱い涙をかんじつつ、合掌したことであらう」(『暁は美しく』)

1941 (昭和16) 年 38歳

11月1日、松竹映画大船作品「桜の国」が封切られる。監督・渋谷実、脚色・池田忠雄、津軽嘉郎、撮影・長岡博之、俳優高峰三枝子・坪内美子・岡村文子・笠智衆・上原謙・斉藤達雄・吉川満子・水戸光子。

11月18日、中国から帰国。船の中で風邪を引き助間神経痛のような症状だったが、太平洋戦争が開戦した12月8日は雑誌の座談会の約束があり、医者に往診してもらい、雑誌社には自動車で迎えに来てもらって出席した。会場は「幸楽」。



『新潮』 1940年4月



『淡粧』 1941年

1941 (昭和16) 年

- 1月1日、「静かな焰」「婦人公論」
- 1月1日、「雪」「令女界」
- 3月1日、「野分立ち」「知性」
- 4月1日、「小箱」「婦人朝日」
- 6月1日、「牢に入つてゐる私」「文庫」
- 6月20日、「東京へ来た時分」「文芸情報」
- 7月1日、「良人」「婦人公論」
- 7月1日、「畑」「日本の風俗」
- 8月1日、「蘇州の水」「三田文学」
- 8月1日、「ひとときの青春」「令女界」
- 9月1日、「野の子」「日本評論」
- 9月1日、「映画物語」「桜の国」「女子青年」
- 9月5日、11月5日、12月5日、12月20日、「思ひ出の手帖」「米搗」「織機」「西洋婦人」・「働くことと躰」『文芸情報』
- 9月17日、無題（長谷川時雨追慕）『輝く』
- 10月1日、「北京を去りし日に―十三年初秋のこと」『月刊文章』
- 12月1日、「深秋記」「現代」
- 8月1日、『淡粧』(淡粧・樺花・早春のころ・墓碑・レオニイ・ギルモア) 小山書店、B6判紙装、1円50銭
- 9月15日、『友情』(回生・野分立ち・良人・椿娘・別れ(楓子の友より頼太へ)・白い館・日光の母子・花より紅い・小箱・四人の手帖・友情) 報国社、B6判厚紙装、1円80銭

大田洋子「十二月八日の夜」

「十二月八日の夜、私はある雑誌の座談会に出る約束がしてあった。その二十日ほど前に支那からかへつてゐたが、船の中から風邪をひいて来たのが、ひどく悪くなり、助間神経痛のやうなものが加はつて、医師から安静を命じられてゐた。(略) 座談会へ出ることも考へあつて承知したのだつたけれど、病気がよくないので自動車を待つて来てもらへるならといふことにした。こんなことをいふのも、自分で傷つくほどいやだつたけれども、いたしかたなく、先方では五時までに自動車でおかへに来るといふ。ところが当日の八日、米英に對して聖なる宣戦が布告されたのだつた。この開戦はびっくりしたり、驚愕の念を抱かせられたものではなく、かくあるべきことが鮮明に具体化されたのだつた。八日は新聞やラジオにくつついてゆき、涙を流し、眼さめるやうな思ひがし、新鮮な焰を感じた。(略)

話が初まつた。けれどもなんとなく静かすぎるのである。今夜のために、昨夜まで考へてゐた言葉には、すでに今夜云つても役立たぬものもある筈だつた。すでに開戦されてしまつたのだつたから。覚悟はとづくに出来てゐて、今夜とくべつ声を大きくして叫ぶことももうない思ひからか、どの人も言葉が少い。いままでの覚悟をやや強く、しかも蛇足的にいふだけのことであつた。けれどひどく落ちついてゐるやうでも、感動からの興奮

1942 (昭和17)年 39歳

太平洋戦争が始まって出版業界は縮小され、執筆の注文は減る。それでも短篇を集めた『星はみどりに』と『野の子・花の子』が刊行されている。

5月26日、情報局の指導で日本文学報国会結成。女流文学部の委員は吉屋信子と村岡花子。

8月17日付、本郷区の揚存梅からの手紙に日本語の日常会話を中国語訳し振り仮名を付けた手紙がきている。中国に行く積りだったのか？

11月1日、「座談会 野上弥生子女史に聞く―懐しい明治の文学体験―」（野上弥生子・小堀杏奴・中里恒子・大田洋子）に出席『婦人画報』



『星はみどりに』 1942年

1943 (昭和18)年 40歳

戦前最後の単行本となるエッセイ集『暁は美しく』と短篇集『たたかひの娘』を出版。『たたかひの娘』は初刷が5千部、4か月後に5千部を増刷しているから、流行作家相応の売行きだったのだろう。ただ、物資が欠乏する時局を反映してB6判三三六ページに使用されている紙質は悪く、製本も雑。表紙は厚紙装だが、クリーム色の無地、

1942 (昭和17)年

1月1日〜12月1日、「真昼（一）〜（三）」『新女苑』

1月、「不幸な読書」『読書人』

1月5日、「思ひ出の手帖―雪―」『文芸情報』

4月5日、「老若」『文芸情報』

4月15日、「女性の道徳」『日本学芸新聞』

4月、「島」『科学思潮』

5月1日、「花の子」『中央公論』

6月1日、「生活の反省」『ホームグラフ』

6月1日、「綾子」『婦女界』

11月1日、「秋の帯」『婦人公論』

5月20日、『星はみどりに』（星はみどりに・回生・秋の終りの夜・粉雪・良人・早春の頃・別れ）有光社、B6判紙装、1円30銭

11月15日、『野の子・花の子』（野の子・花の子・海女・深秋記・紅葦・生きる子等・ある旅の終りに）有光社、B6判紙装、2円30銭

1943 (昭和18)年

1月15日、「生きる道」『日本学芸新聞』

2月1日、「名月」『文庫』

3月1日、「季節の賦」『婦人公論』

4月1日、「初雪」『婦人公論』

4月15日、「蒔かぬ種は生へぬ」『日本母性』

7月1日、「物事を積極的に！」『女性生活』

10月1日、「風の中に花はひらく」『日本少女』

はかくし切れぬものだった。感動が劇しく外へ流れ出やうとするのを知的なもので抑えつけるところから、ふしぎな静寂さが生れたのであらう。二・二六事件のとき、この幸楽が使はれたことも思ひ合され、時代の推移に心を深くうたれなくてはあられなかつた」（『暁は美しく』1943年）

大田洋子『星はみどりに』「まへがき」

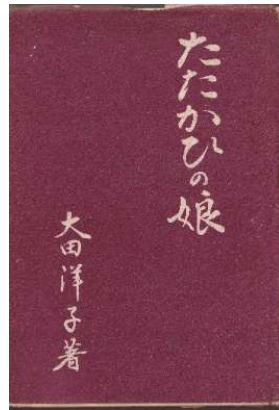
『星はみどりに』は二・二六事件のあつた年の夏に書き終つたものである。あの大雪の年の前後にみなぎつた避けがたい作家の動揺やなものかに悩みくるしんだ人々の生活を、私はいま思ひ出してゐる。『星はみどりに』の中に雪の前後を書いたが、作者の意のあるところは、日本評論に載つたとき消え去つてゐた。

あの当時、故郷へ行つて四箇月すごしたが、東京へ帰つたとき、ある作家に仕事をしてきましたかと訊ねられた。私は一つだけ書いたことを話した。するとその作家は、一つでたくさんですよ、多いくらゐるです、と云はれた。この言葉の意味が、ちかごろになつて私を打つてゐる。

私にはどの作品についても、なつかしいとか気に入つてゐるとかいふことがまつたくなく、読み返して悲哀や後悔のやうなものを感じる事が多い。ひたむきに書いた作品に却つて失敗し、ひたむきだといふことと、文学の本質とは異なるもので

カバーも同じく小豆色の無地一色に白抜きで題名が書いてある質素な装幀である。厳しい用紙事情の中で装幀に手間をかけるゆとりがなかったことをうかがわせる。

収録されている短篇のなかに、女中ものといえる作品が三篇ある。慰問袋を贈った相手と結婚する「小牧花江」、眼に障害がありながら看護婦をめざす「十七歳」など戦時下で積極的に生きる女性として描かれている。



『たたかひの娘』 1943年

1944 (昭和19)年 41歳
母トミが広島に疎開。お手伝いさんも雇える状況ではなく、一人で家事をこなさなければならなくなり、練馬区のアパートに引っ越す。

1945 (昭和20)年 42歳
1月、戦火が激しくなり、広島市白島九軒町の妹中川一枝宅に疎開。
4月、内臓を患い、日赤病院に入院、7月、退院。

11月、「青湖」『女性手帳』

12月、「武蔵野電車」『政界往来』

3月18日、『暁は美しく』(暁は美しく・小さなノートより・厨・馬・不幸な読書・男性について・島・

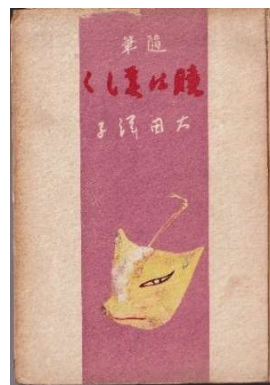
勤労の快さ・十二月八日の夜・「海女」のこと・四人のごとく・文化運動と文化・生活の反省・女性の道徳・生活の端・女性の職業の求め方・ある旅の手帖より・支那の女尊男卑・二人の市長・尚小雲のことなど・蘇州の水・北京の夫人方・思ひ出の手帖・おぼげ様の回想・旅行のことなど・日本のお茶・健康について・初秋・柴屋寺・畑・驟雨・金魚・着物・緑の窓に・隣り屋敷・海・秋の手紙二つ・海辺の宿で・故郷にて・春は臙に・海苔を作る町にて・魔術・ケツセルの「昼顔」・コクトーの声) 赤塚書房、B6判厚紙装、2円30銭

3月20日、『たたかひの娘』(たたかひの娘・老若・綾子・小牧花江・黒い大きな靴を履いて・祭のころ・水・十七歳) 報国社、B6判厚紙装、2円7銭

1944 (昭和19)年
4月1日、「適応性への努力」『文学報国』

1945 (昭和20)年
1月20日、「戦ふ女性」『文学報国』
2月1日、「白雁」『新青年』

あることを知るばかりである。美しく完成された作品を書き得るのは、いつのことであらうか。未完成な作品の眼立つ私は、このことについて考へ勝ちである」(1942年)



『暁は美しく』 1943年

<p>履 歴</p>	<p>1945 (昭和20) 年 42歳</p> <p>7月、郷里の玖島に疎開するつもりで、広島市白島九軒町の妹中川一枝宅で荷物をまとめていたが、頼んでいる自動車が来ず、8月を迎える。</p> <p>8月6日、中川宅で、母トミ、妹母子とともに被爆。二階に就寝中で、気がついたらもうもうと壁土が舞う中に立っていた。3日間、神田橋下手の大田河原で野宿したのち、佐伯郡玖島(現、廿日市)に逃れ、広谷旅館、続いて松本商店の二階、玉藤家へと移る。</p> <p>8月30日、『朝日新聞』に随筆風の被爆報告記を寄稿。人類史上初の被爆体験記となる。</p> <p>11月、被爆体験を綴った草稿(のち「屍の街」として出版)を脱稿。</p> <p>1946 (昭和21) 年 43歳</p> <p>1月、『中央公論』編集部に「屍の街」を送る。原稿を受け取った編集者の海老原光義は「これは証言として大変なものだ。後世に残すべき作品だ」と思ったが、編集長畑中繁雄の判断で送り返す。</p> <p>3月、玉藤家から佐伯郡友和村河津原の江島医院の二階に移る。</p> <p>3月から翌年3月まで、広島県佐伯郡の新建設社発行の『新椿』に「青春の頁」を連載しており、原爆をモチーフにした最初の小説。</p>
<p>作品年譜(初出・著書・文学選集と再録類)</p>	<p>1945 (昭和20) 年</p> <p>8月30日、「海底のやうな光―原子爆弾の空襲に遭つて」『朝日新聞』</p> <p>1946 (昭和21) 年</p> <p>3月25日・6月1日・7月1日・8月1日・9月1日・12月1日、「青春の頁」『新椿』</p> <p>5月29日・6月1日 「緑の谷間にて(1)(2)」『万朝報』</p> <p>7月1日、「人間勉強について」『瀬戸内海』</p> <p>7月1日、「仮睡―ある混血児の手帖(前篇)『婦人画報』</p> <p>8月1日、「仮睡(後篇)」「婦人画報』</p> <div data-bbox="817 824 1107 1245" data-label="Image"> </div> <p>『真昼の情熱』 1947年</p>
<p>資 料</p>	<p>大田洋子「海底のやうな光―原子爆弾の空襲に遭つて」</p> <p>「広島市が一瞬の間にかき消え燃えただれて無に落ちた時から私は好戦的になった。かならずしも好きではなかつた戦争を、六日のあの日から、どうしても続けなくてはならないと思つた。やめてはならぬと思つた。(略) 六日の朝の八時すぎ、広島市で朝をむかへたほどのひとびとは、あの夏の朝の思ひがけぬ不気味な光線の色を未来永劫に忘れることはないにちがひない。私は母や妹の住んでゐる白島九軒町の家にあつた」(『朝日新聞』1945年8月30日)</p> <p>畑中繁雄(中央公論社編集者)『覚書 昭和出版弾圧小史』</p> <p>「占領軍の事前検閲ははるかに大規模であつて、新聞雑誌はもとより、単行書、パンフレットの類にいたるまで、刊行物の全領域におよび、雑誌・単行書のばあいは本文、広告類はもとより、表紙、裏表紙にいたるまで全部とりそろえて提出しなければならなかつた。ところが、いったんこれにひつかつたとなると、有無をいわさず、削除、撤回は先方側のおもひのままであり、こちら側の釈明、言い分はいつさい聴かれなかつた」(図書新聞社、1965年)</p>

秋、安芸郡江田島村切串の共産党員で農民運動家の筧中静雄から講演の依頼を受ける。江田島で教師をしていたときからの顔見知り。

8月、鎌倉文庫が創刊した『婦人文庫』を拠点に女流文学者が再建され、会長は吉屋信子。初期の会員は34人で大田も会員になる。

11月、「河原」が東京の能加美出版社の『小説』創刊号に載る予定が、雑誌が出版禁止になる。その後、掲載作品を入れ替えて48年2月号に掲載された。被爆後、河原で暮らす女主人公の心理描写が詳しい。原爆の具体的記述はないが、地名などから広島とわかる。

1947 (昭和22)年 44歳

1月、佐伯郡友和村(現、廿日市市)河津原の江島家で、呉からきた進駐軍兵士の尋問を受ける。その様子はのち「山上」に描いた。

1月、戦後初の単行本『真昼の情熱』を丹頂書房から出版。1942年に『新女苑』に連載した「真昼」に一部、加筆・削除した。日中戦争下の青島が舞台の長編恋愛小説で、反戦的な内容を加筆し、戦争を肯定するような科白が一部削除されている。

5月末、筧中静雄と結婚。筧中の妻は死亡しており、周囲の反対をおして江田島の山城旅館で簡素な式を挙げ、大田の母、妹、義弟らが出席。しばらく江田島で暮らしたが、秋には二人で上京。筧

9月1日、「生活、恋愛、文学を語る―畑耕一・大田洋子対談会」『郷友』



『屍の街』1948年

1947 (昭和22)年

1月1日、3月1日、「青春の頁(第7回・最終回)『新椿』」

5月1日、「六如抄―ある手記の内―」『新小説』

8月1日、「高啼くひと」『婦人文庫』

10月1日、座談会「結婚新論(高見順・大田洋子・野田静子)」『女性ライフ』

10月1日、「かへらぬひと」『女性ライフ』

11月1日、「高原の秋の日に」『美貌』

1月15日、『真昼の情熱』丹頂書房、B6判厚紙装

30円

大田洋子「山上」

「『あなたの書かれた小説の原稿というのは、あなた以外に、これまで、誰と誰とが読んでいますか』
『私が読んだだけで、東京のC社に行っています。C社の編集部のEさんが読んで手紙をくれましたから、Eさんはたしかに読んでいます』
『Eさんはどんな思想と主義を持っている人ですか』
『自由主義者です』
『あなたのその原稿に、原子爆弾の秘密が書かれていますか』
『いいえ。私は原子爆弾の秘密は知りません。私の書いたのは、広島という都会とそこにいた人間のうえに起こった現象だけです』。(略)
『あなたに原子爆弾の思い出を忘れていただきたいと思います。アメリカはもう二度と再び原子爆弾を使うことにはないのですから、広島の出來ごととはわすれていただきたいと思えます』。私の間をおいてから答えた。『わすれることはできないと思います。わすれたいと思っても、わすれない気がしています。市民としては忘れたいと思っ~~て~~いますが、わすれるということ、書くこととは別です。遠い昔の忘れていたことをも、作家は書きます』
(『群像』1953年5月)

筧中静雄(夫)談

「昭和20年11月に京城から引き揚げてきましたね。翌年、高津正道の衆議院議員選挙の手伝いをしたり、尾道と三原地区の初代の農民組合の連合会長になった。文化国家ということ、日本中の村か

中の子供四人は彼の実家に預けた。母トミの最初の結婚相手の娘である小泉清子を頼る。まもなく二人は中野区野方のアパートに移る。11月25日の住所は東京都中野区野方一―八一〇。寛中は、「屍の街」を出版しようと奔走するが不調に終わる。

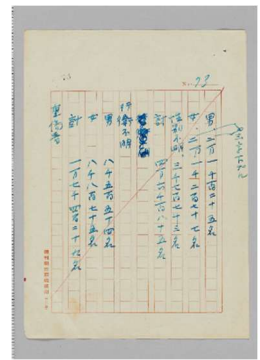
1948 (昭和23) 年 45歳

5月17日、中央公論社を訪れ、『屍の街』の草稿を渡す。対応した社長秘書笹原金次郎の日記に「5・17 大田洋子来社 雨の日」、「5・27 大田洋子著『ひろしま』の原稿清書完了」とある。社長嶋中雄作の一言で出版が決まった。現在、日本近代文学館が収蔵している手稿で、八種類の原稿用紙とワラ半紙を使用し、後半部分は原稿用紙の裏にも書いてある。校正段階でタイトルは「屍の街」に、「無欲顔貌」の章のほか、プレスコードに抵触しそうな部分が編集部によって削除、11月に出版された。

8月12日、随筆「あらゆる知能と善意を―八月六日に寄せて」で、「原子力はその超世紀的な偉力によつて戦争を終わらせた」が、「原子力は将来の戦争をもなくするであろう」という考えは危険である」としている。

11月、寛中静雄との結婚生活を解消し、寛中は新天地を求めて北海道に去る。

削除された『屍の街』中央公論社版



1948 (昭和23) 年

1月1日、「渴くひと」「自由婦人」
2月1日、「河原」「小説」
4月1日、「火焰木」「新婦人」
5月15日、「牢獄の詩」「新日本文学」
6月、49年2月、「春の泉」「青空」
8月1日、「白魚」「モダン日本」
8月12日、「あらゆる知能と善意を―八月六日に寄せて」『婦人民主新聞』
8月14日、「再びあの日のなきこと」『民国』
9月1日、「不知世」「新小説」
11月1日、「人世座」「婦人画報」
11月1日、「座談会・戦後の恋愛と結婚を語る(石川達三・三岸節子・大田洋子)」「婦人」
12月1日、「時代の生んだ仇花―結婚なき恋愛―」「女性ライフ」
3月1日、『情炎』新人社、B6判紙装、85円
11月10日、『屍の街』中央公論社、B6判紙装、120円

ら町の至るところに青年を中心として文化サークルができてきたね。わたしの友人で切串で劇場をやっている男が、サークルをやっている文化人を呼んで講演会をやろうという。中国新聞社に行つて大田の住所を聞き手紙を出したらすぐに返事が来て、宇品まで青い鞆を持っていくから、それを目印に波止場で会おうということになったんです。教え子を集めて親睦会をしました。食べ物のない時代でしょ、わたしは当時切串の区長をしていたので、支持者に舟を出してもらつて釣りに連れて行つたなあ。クロダイを釣つて七輪で焼いて食べた。翌日、学校で講演をしてもらつたが、何を話したか、覚えていない。講演が終わつてしばらくして電報が来て『会いたいから来てくれ』と。行つたら結婚したいということで、ウンもスンもなかったですよ。

原爆の惨状を書いた原稿を持つているけれど、進駐軍が来て出さないでくれという、だけど世に出したい。それを見てくれと言うんですよ。ところが中に共産党に対する否定的な意見が書いてある。これは非常にいかん。あなたの『屍の街』が共産党の民主的な運動に否定的であれば、マイナスであるということをだいたい話しました。共産党は何を改革するのか、原点から話した。あまり大きな抵抗はなかったように思うんですが、正直言つて民主的な運動に関する部分に僕が手を入れました(1971年4月12日)

1949 (昭和24) 年 46歳

1月14日、蔵原惟人、小田切秀雄らの呼びかけで文芸家懇談会に出席。

3月6日、新日本文学会東京支部第四回総会(新橋産別会館)で瀬沼茂樹らと支部委員になる。

8月1日、『改造』に「8月6日8時15分(のち「一九四五年度の夏」と改題して冬芽書房版『屍の街』に収録)を発表。原爆被害の実態が具体的に、文末に「(広島上空で炸裂した原子爆弾の圧力は、ジョン・ハーシーの『ヒロシマ』に依る)」とある。

9月30日、「積みかさなる誤り」で、永井隆の『ロザリオの鎖』を非科学的だと非難。

この年、長篇小説「白孔雀」、50年にも「黄なるくちなし」を少女雑誌『ひまわり』に1年間連載し、単行本も『ホテル・白孔雀』、『春の訪ずれ』を刊行するなど52年頃まで少女小説を多作。敗戦によって生きる方向を見失った少女たちに美しさと夢を通して生き方を示した。



『春の訪ずれ』 1949年

1949 (昭和24) 年

1月1日 「人形館」『女性ライフ』

1月〜12月、「ホテル・白孔雀」『ひまわり』

4月27日、回想としてのみならず―現代史の象徴として―『日本読書新聞』

7月1日、「洗心抄」『婦人文庫』

8月1日、「いまだ癒えぬ傷あと」『婦人』

8月1日、「8月6日8時15分(のち「一九四五年度の夏」と改題)『改造』

8月1日、「原子爆弾抄―傷は新しく疼きはじめている―」『女性改造』

8月1日、「原子爆弾」『働く婦人』

9月30日、「積みかさなる誤り」『婦人民主新聞』

12月1日、「崩れてゆく」『読物街』

6月15日、『春の訪ずれ』(春の訪ずれ・風の中の花) 東光出版社、B6判紙装、80円

12月25日、『ホテル・白孔雀』ポプラ社、B6判紙装、85円

長谷川鑛平(中央公論社社員)談

「『屍の街』はおそろおそろ中公が出した。それで問題がなかったから、よそも思いきったものをやるようになった。削除したのはわたしの意志ではなく、社の代表で…。あの章は新聞の切り抜きその他、数字が多くそれだけアクチュアリティが強くなるので削除してもらえないだろうか。そうでもないこと出版に踏み切れない。GHQがこう書けないこと直すと、かえって作品が歪められることになるからということに納得してもらいました。それにあすこに出てくる数字に疑問をもたれていたということもあります。地方新聞の記事だから過小評価したということです。数字を出すのは、アメリカを怒らせるのではないかということです。従って『無欲顔貌』の章は削りました。

結果的にGHQからは何も文句はこなかったですね。他のこまかい文章を書き直させたり、こつちで表現を変えたりしたことはありません。冬芽書房版と違うところがあるとしたら、本人が書き直したのだろう。大田さんは中公版に不満だった。こちらは『それなら時期を待ってまた出版したらいいでしょう』と言ったから、冬芽版が出てても文句を言えなかった。わたしの言ったことを言質にとられても仕方がない。本当は10年、中公に版權があるのですがね」(1972年5月29日)

1950 (昭和25)年 47歳

前年から『人間檻樓』の執筆を開始している。冬
芽書房版『屍の街』の「序」に「いずれの日か私
は、不完全な私の手記を償うべく、かならず小説
作品をかきたいと思っている」と書いており、そ
の実現をはかった。被爆の惨状を繰り返し思いだ
し、言葉を探しながら書く作業の苦しさから睡眠
薬と鎮静剤を常用するようになる。



『屍の街』 1950年



『アサヒグラフ』 1950年5月

1950 (昭和25)年

- 1月1日、「今日的」『新日本文学』
- 1月〜12月、「黄なるくちなし」『ひまわり』
- 1月1日、「誘惑者」『婦人画報』
- 1月1日、「アンケートあなたがあがもし、天皇にお会
いしたら何をお話するか？」
- 1月21日、「近代女性の背景」柴田早苗著『娘の
世界』を読む『朝日新聞』
- 2月1日、3月1日、「紅と赤いきものと血」『女
性改造』
- 4月1日、「人の影」『文芸読物』
- 6月、「私の好きな恋愛」『それいゆ』
- 7月1日、「戦争は起きないという答え」『暮しの
手帖』
- 8月1日、「一九四五年夏」『改造』
- 8月1日、大田洋子・芹沢光治良対談「広島のか
び（グラフ対談）」『毎日グラフ』
- 8月2日、「戦争と文学者」『日本読書新聞』
- 8月16日、「大田洋子さん（ヒロシマを記録した
人々告知板）」『アサヒグラフ』
- 5月30日、『屍の街』（序・いまだ癒えぬ傷あと・
屍の街・一九四五年の夏・原子爆弾抄）、冬芽書房
B6判厚紙装函入、200円

藤田圭雄（中央公論社社員）談

「当時わたしは出版部長になってからCIA（民
間情報教育局）に呼ばれて、検閲でだめだと言わ
れたところを〇〇（伏せ字）にしてはいけないな
どと説明を受けましたね。下検閲をやるのは日本
人だから、なるべく責任が来ないように全部サブ
レス（抑制）してしまう。いいとか悪いとかの判
断ではなく、なるべくさしさわりのないようにし
たんですね。まず原爆の小説だという観念がある
から厳密に目を光らせたのだろうと思う」（19
72年5月29日）

大田洋子『屍の街』の「序」

「私は一九四五年の八月から十一月にかけて、生
と死の紙一重のあいだにおり、いつ死の方の方に引き
摺って行かれるかわからぬ瞬間を生き、『屍の
街』を書いた。（略）当日、持物の一切を広島の大
火災の中に失った私は、田舎へはいつてからも、
ペンや原稿用紙はおろか、一枚の紙も一本の鉛筆
も持っていなかった。当時はそれらのものを売る
一軒の店もなかった。寄寓先の家や、村の知人に
障子からはがした、茶色に煤けた障子紙や、ちり
紙や、二二本の鉛筆などもらい、背後に死の影
を負ったまま、書いておくことの責任を果してか
ら、死にたいと思った」（冬芽書房、1950年5
月）

1951 (昭和26) 年 48歳

4月24日、宮本百合子をしのぶお茶の会が新宿中村屋で開催され、中島健蔵らと出席。

5月30日、青年フォーラムの会主催「原爆のおしえ」講演会で「原爆体験者として、私の怒りはいまもなお深い」を講演。

5月、京大大学学生が原爆について展示。大田は招かれて講演し、学生たちとの座談会にも出席、「私達広島にいた作家はほかのすべての仕事をすてても原子爆弾について書きつづける義務があると思う」と語る。

この年、練馬区豊玉北二の一登坂宅に住む。この家について「ムダのない小じんまりした家に住むのがきらいでガランとした大きな家に住んでいる。これが自慢で、合理的とかいってそののない家より間がぬけているのがいい」(「ご自慢ノート」)。

暮れ、不安神経症が昂じ、東大病院神経科に入院
睡眠持続療法を受ける。



『人間檻樓』1951年



『屍の街』1951年

1951 (昭和26) 年

1月1日、「絵と小説」『新日本文学』

2月1日、「蛆——一九四五年夏——」『世界』

2月1日、「過去」『婦人公論』

2月、「花とハンカチーフ」『ひまわり』

3月1日、「蛆——一九四五年夏——」『世界』

4月1日、「わが文学の泉」『群像』

5月1日、「死の魔手」『婦人公論』

5月28日、「原爆〇伝えるのが務め 作家大田洋子ほか京大生二名」『学園新聞』(京大大学新聞社)

6月1日、7月1日、8月1日「崩れてゆく——九四五年夏以後——」(のち、「人間檻樓」と改題)

『人間』

8月1日、「原民喜の死について」『近代文学』

8月1日、「原爆体験者として、私の怒りは今もなお深い」『婦人画報』

11月1日、「灯」『新女苑』

11月1日、「城」『群像』

11月1日、「恋」『文学界』

11月1日、「池袋の黒い花」『婦人公論』

11月、「だが耐え難く疼く痛みは黙って耐え抜けるものだろうか」『愛になやみ死を恐れるもの』理論社

8月15日、『人間檻樓』河出書房、B6判厚紙装

カバー帯付、250円

8月15日、『屍の街』、河出書房(市民文庫)、文

庫判紙装、90円

阿部知二「『人間檻樓』解説」

「あの広島、惨事については、多くの有名無名の人が、小説や詩歌や手記に書いたのであるし、また大田さん自身には、この『人間檻樓』のほかにも、『屍の街』『半人間』などと、心にのこる作品があるが、それはそれとして、これは一つの記念すべき作品である。われわれは、こういう作品を読むにつけて、あのような大量殺戮の非人間的なむごたらしさに、今さら戦慄して、原子戦争のごときものを世界から駆逐しなければならぬと感ずる。(略)この小説を『原爆小説』ということとは当たらないであろう。これはやはり『原爆』そのことを描こうとするよりも、むしろそれを背景において、その惨禍のなかに死ぬるもの生きるもの、さまざまの人間の運命を描き出そうとしたものである。戦争の前のころから、社会的なひろがりを持つとうとしていた大田氏であったから、ここでも、その原爆投下というもの凄惨な場面の中に、たくみな構成を以て、一群の人間がうごくありさまを、劇的に展開する力をしめたのである」(『新潮文庫』1955年)

1952 (昭和27)年 49歳

2月、江口渙が文芸時評で前年発表した「城」に触れて大田をこき下ろしたのに対し大田が激しく反論、いわゆる「大田洋子・江口渙論争」になった。4月、『人間檻樓』が吉屋信子の「鬼火」とともに第四回女流文学者賞を受賞。第三回までは鎌倉文庫が出していたが、この年から女流文学者会の事業になった。副賞五万円。

この年、旧『女人芸術』の同人だった熱田優子、内田生枝、日下典子、原田春乃、松下文子らが同人雑誌『女人像』を始める。大田も誘われてときどき顔を出す、作品は寄稿していない。



1950年代

1952 (昭和27)年

1月1日、「新しい文学運動及び新人に何を期待するか」『エスポワール』
1月、「マダム・レナールとその愛人」『ひまわり』
1月、「マリオよ、君のために」『ひまわり』
2月1日、「婦人記者だったわけではない」『婦人公論』

2月28日、「『自慢ノート』」『毎日新聞』
4月1日、「春ざらい」『産業経済新聞』
4月1日、「アンケートーチャタレイ判決とその第二番について他」『新日本文学』

5月1日、「広場の孤独と共通の広場」『近代文学』
5月28日、「鼎談」『学園新聞』（京都大学新聞社）
6月1日、「暴露の時間」『世界』
6月1日、「どこまで」『小説公園』

6月1日、「今、私は何を主張するか？」『文芸』
7月1日、「作家の態度」『近代文学』
7月1日、「復活したい戦前のもの三つ」『群像』
7月17日、「生きのこりのことば」『毎日新聞』
8月1日、「広島から来た娘たち」『世界』

8月1日、「貴方が今二十代なら何をするか？」『希望』
8月1日、「海にゆく娘」『ひまわり』
10月15日、「せめて24時の生活を」『改造』
11月15日、「生き残りの心理」『改造』

9月1日、『人間檻樓』青木書店（青木文庫）、文庫判紙装、90円

大田洋子・江口渙論争

「『屍の街』『檻樓の列』とつぎつぎに力作を書いたせい、さすがの原爆小説の本来本元も相当種ぎれのていと見える。もう一度広島にかえつてもつといい種を仕入れてくるんだな」（江口「文芸時評」『新日本文学』52年2月）、大田「このごろは文学者が文学者らしくもないことを書くのが流行っています、こういう不謹慎なことをいう暇に自ら広島に出かけて裏町の隅々にどれだけの原子爆弾不具者が辛じて生きているか、一眼看着来るといいのです」（『作家の態度』『近代文学』同年7月）、江口「さすがの原爆ものも種ぎれのと見える」などとあたかも原爆文学一般が種ぎれになったとは、この私はどこにもかいていない。（略）広島長崎にゆけば原爆文学の種は無限なのだ。大田洋子は早くからだをなおして元気になつて、あのような文学の無限の宝庫の中へもつと深く入りこんでいつてほしい」（江口「大田洋子に答える」『近代文学』1953年3月）

平林たい子「大田洋子さんと私」

「次第に、原子爆弾の害悪を世間が声高にいうようになってから、彼女は『人間檻樓』という小説をかけた。この小説がその年の女流文学賞の候補になった。上京してから、どこに住んでいたか知らなかった彼女からこの時不意に猛烈な働きかけがきたにはおどろいた。速達かき、電報かき、

1953 (昭和28) 年

1月から4月まで、志條みよ子「原爆文学について」をきっかけに『中国新聞』紙上で「第一次原爆文学論争」が展開される。

夏、広島市基町の戦災者住宅に住んでいる妹の中川一枝宅に手伝いの人を連れて滞在。基町住宅と隣接する相生土手の人々の姿をルポルタージュ。

街を案内する「原爆友の会」のモデルは「原爆被害者の会」の川手健。新聞記者は中国新聞学芸部記者の金井利博。それに「原爆一号」と言われる吉川清。最後に米国の裁判所に原爆投下責任者を提訴しようとしている弁護士を訪ねる。雑誌に分

載したのち『夕風の街と人』として講談社から刊行する。

7月22日、新日本文学会常中委は平和委員会に大田洋子ら15人を選出。

この頃、練馬区春日町野一八二三に住む。

10月、中国新聞社の座談会に出席し、「広島は人間への愛情が一ばん強く出なきやならないところなのに、なおさらその反対の冷酷なものを強く感じさせるでしょ」と語る。

11月18日、黒島伝治十周年忌追悼の会が東中野の「モナミ」で開かれ、黒島の思い出を語る。

1953 (昭和28) 年 50歳

1月1日、「紫真珠」『小説公園』

2月21日、「好きな史上の人―ウインザー公（エドワード八世）」『朝日新聞』

3月27日、「原爆詩人の死―峠三吉のこと」共同通信社

4月1日、「広場日記」『群像』

5月1日、「山上」『群像』

6月1日、「ほたる―H市歴訪のうち―」『小説公園』

7月1日、「不満な選挙」『近代文学』

7月1日、「マッカーサー道路との対比―『H市歴訪』のうち―」『群像』

8月1日、「座談会・現代の課題（大田洋子・中本たか子・畔柳二美・大原富枝・信夫澄子・佐多稲子）」『新日本文学』

9月1日、「愛するふるさと」『美しい暮しの手帖』

10月1日、「杉浦明平著『ノリソダ騒動記』」『近代文学』

10月22〜25・27日、「文学ひとすじ―大田洋子女史を囲んで（大田洋子・田辺耕一郎・中井正文・薄田太郎・斎木寿夫・川島義高）」『中国新聞』

12月25日、『流離の岸』角川書店（角川文庫）、文庫版紙装 100円

また速達が来、彼女がたずねてくる。私は彼女の日常生活振りはいつも笑って見ていたが、彼女の芯にある文学魂は尊敬していたから、彼女の依頼に応じて、あちこちに電話をかけたなり、会って頼んだりした。結局吉屋さんと二人でその年の賞を頒けることになったが、あまり烈しい運動振りを非難する人もあった。」（『自伝的交友録・実感的作家論』1960年）

大田洋子の発言「座談会 文学ひとすじ―大田洋子女史を囲んで」

「わたしの性格は鼻っばしらが強くて、おくびょうで負けずぎらいで、弱気で（笑声）性格分類上そういうのがあるそうよ…（略）一流ではない上等ではありたいが、流行作家、花形作家もいや、村長になるのもいや、会などの委員長が大きい、多ぜいの人なかに華やかに動くことも大きい、作家だなんだといって銀座に押ししたりするとかえって寂しくなるたちなの。表通りを堂々とまかり通ることががらない。こないだも野間宏氏が推薦して平和大会にゆけと奨められたけれど代表になるなんてイヤなの。代表だとか、委員長だとかイヤだわ。流行作家とは別ものなのよ。そういうのへひきずりこもうとする人がかりにあつても、そうなれないたちなんです」（『中国新聞』1953年10月22日）

1954 (昭和29) 年 51歳

1月8日、原爆被爆者が米国政府およびトルーマン大統領ら原爆投下関係者らを相手どつて損害賠償をするための会議開催。大田も出席してコメント。「原爆使用というアメリカの過去の罪は罪としてあくまで追及すべきです。一方がこうした訴えをなすことにより将来人類の歴史から戦争を放棄すべく世界の各国民に呼びかけるのは当り前のことでしょう」(『中国新聞』1月9日)。
3月、不安神経症で入院した体験をもとに「半人間」を発表。主人公は「戦後三年間、拷問されている思いです」と医師に訴える。
3月、ビキニ環礁で漁船が米国の水爆実験で被曝。原水爆禁止運動が広がるが、その動きに背を向けるようにして旅に出る。
7月、静養をかねて静岡県伊東市岡区の伊東温泉大川岸の水口旅館に滞在。第五福竜丸乗組員の久保山愛吉が亡くなった9月頃から体調が悪くなった。原爆症の不安に苛まれる。
9月22日、婦人公論編集部永倉アイ子から「手錠をかけられた女と私」(400字二枚)が返却。
12月、『半人間』で一九五四年度平和文化賞受賞。原爆が作者の肉体と精神の内部にまでさまざまな破壊力をふるい続けているかを描いて好評。「半人間」がこの年上半期の芥川賞候補になるが、既成作家ということで落選。当選作は、吉行淳之介「驟雨」。

1954 (昭和29) 年

1月1日、「宮島ホテル」『小説公園』
1月1日、「黒い雲」『平和』
3月1日、「半人間」『世界』
3月1日、「残魄点々―日市歴訪のうち―」『群像』
4月1日、「どこまで」『別冊文学の友』
4月15日、「星の世界へ」『毎日新聞』
5月1日、「ピカドンはごめん―世界の幸福と原爆廃棄―」『婦人朝日』
6月30日、「山の匂い」『小さな自画像―わが幼き』101人集』朝日新聞社
7月1日、「暗い影はなに？(あなたの心にきざす暗い影は何か?)」『芸芸』
8月15日、「青い服と古めかしい着物」『現代日本文学全集35巻 月報』筑摩書房
11月1日、「夕風の街と人と―一九五三年の実態―」『群像』
12月1日、「山帰り」『文学界』
5月5日、『半人間』(半人間・残魄点々・山上・どこまで・恋)、大日本雄弁会講談社、B6判紙装、カバー帯付、260円



1950年代

原田東岷『ヒロシマ歷程』

「昭和二十七、八年の頃であつたらうか。当時原爆文学で頭角を現わしつつあつた大田洋子さんが、私の診察室を訪ねて来た。私も当時一生懸命ケロイドの治療法を模索しつつあつた時だったが、洋子さんは彼女が次に書く本の中に原爆後遺症のことを取り上げるための取材に来たのだった。私たちは初対面であつた。彼女は私からケロイドという魔性の痕痕について根掘り葉掘り聞き取っているうちに、だんだんエキサイトしてきた。『先生はなんでABCの医者などと交際をするんですか？やつらは原爆症の調査をして、次の戦争の資料にするんですよ。なのに先生ったら、ケロイドの切除組織をABCに送って、顕微鏡見本を作ってもらつたりして！ 恥ずかしいくないですか？』彼女の舌鋒は凄まじく、私はタジタジになつたが、『私は医者だからこの未知の疾患の治療を確立したいのです。次の手術をもつと成功させるためなんです。次の時代のために誰かが原爆症の研究をせねばならん。日本人もアメリカ人もない。今は平和なんですよ』という意味のことで反駁した。洋子さんはいつそういきり立つた。『先生はアメリカが憎くないの？…じれつたいわねえ。やっぱり原爆をじかに体験しなかつた人には理解できないのかねえ』といらだたしそうに言った」(1982年、未来社)

1955 (昭和30)年 52歳

この年、中野区鷺宮四の九三〇に家を買う。西武新宿線の鷺宮駅と下井草駅の間雑木林を切り開いた農地の中にあり、東隣は劇作家で演出家の村山知義の弟村山英治宅。英治は桜映画社を立ち上げた人。大田宅に電話はなく63年まで村山宅の呼び出し電話を使用させてもらった。髪を栗色に染める。



『半人間』 1954年

1955 (昭和30)年

- 1月1日、「女」『小説公園』
2月27日、「転変」『毎日新聞』
5月1日、「私と『原爆症』とについて」『新日本文学』
8月1日、「夕風の街と人と(続)」『新日本文学』
8月1日、「冒瀆」『群像』
10月1日、「アンケート 現代・歴史的かなづかいについて」『知性』
11月1日、「剪纸と月餅」『新日本文学』
12月1日、「市代の果て」『小説公園』
7月25日、『半人間』(「半人間」「残醜点々」「山上」どこまで) 大日本雄弁会講談社(ミリオン・ブックス)、新書判ビニール装 130円
9月15日、『屍の街』(序・いまだ癒えぬ傷あと・屍の街・九四五年の夏・原子爆弾抄) 河出書房(河出文庫)、文庫判紙装、100円
10月10日、『人間檻樓』新潮社、文庫判紙装 80円
10月25日、『夕風の街と人と』大日本雄弁会講談社(ミリオン・ブックス) 新書判ビニール装 140円
10月25日、『半人間』(半人間・残醜点々・山上・どこまで・恋) 新潮社、文庫判紙装、80円

花田清輝「原子力問題に対する二十世紀芸術」『夕風の街と人と』について)

「いずれも原爆の直接の被害者たちの最近の生態の精細な報告であり、繰返すまでもなく、それにはそれなりの存在理由がないとはいえないが、依然として、私小説、心境小説の手法で描かれている。いったい、私小説だとか、心境小説だとかいうものは、作者のモラル・バックボーンによって支えられて、はじめて成立するものであり—したがって、一見したところ、事実の赤裸々な報告のように見えるにせよ、つねにその事実は作者の道徳的価値判断によって歪められており、厳密な意味において記録文学と称しがたいことは言うまでもない。(略)戦後十年近く過ぎてしまった現在、スラム街に住んでいる市民たちの不幸の原因を、さまざまな中間項をとびこえて、いきなり原爆とむすびつけてしか考えられないような精神状態では、もはやこの作者に、事実の客観的報告は期待しがたい」(小田切秀雄『原子力と文学』)

村山恒夫(隣家村山英治家の次男)の回想

「大田洋子さんも当時、電話を持っていなかった。そのため、新聞社や出版社から電話がかかってくると、大田さんの家まで走るのが私の仕事になった。『おおたさん、デンワですよ』そのおおたさん、大田洋子が『原爆作家』といわれる、有名な作家であることを知るのは高校、大学の頃だったのだらう

1956 (昭和31)年 53歳

母トミが広島から上京して同居する。

「半放浪」で原爆文学から後退したとされる。

4月1日、NHK第一放送で「流離の岸」が放送される。演出・岡崎栄、脚色・吉田文五、配役は寺岡千恵・野中悦子、母萩代・竹内和子、高倉・岩崎徹、深瀬龍吉・竹田淳など。

6月21日、日活映画「流離の岸」が封切られる。脚本・監督新藤兼人、撮影・伊藤武夫、配役は、寺岡千恵・北原三枝、萩代・乙羽信子、祖母宇多・村瀬幸子、深瀬龍吉・三国連太郎など。

1957 (昭和32)年 54歳

8月5日、第三回原水爆禁止世界大会第四分科会「被害対策及び被害者救援について」に神崎清らと助言者として出席。



『夕風の人と街』大日本雄弁会講談社

1956 (昭和31)年

3月1日、「半放浪」『新潮』

3月1日、「文学のおそろしさ」『女流文学賞(昭和二十七年)』—『新潮』

4月15日、「貧富」『別冊小説新潮』

6月1日、「はだしの女」『小説公園』

8月1日、「私は忘れたい広島の思い出を」『婦人画報』

9月1日、「ある落ちた場所」『世界』

9月1日、「アンコール」『新潮』

1月31日、『現代女流作家名作選』に「静か雨」収録、現代社

1957 (昭和32)年

1月1日、「かちどき山の景色」『文芸』

1月1日、「思うにまかせぬ好き嫌い(好きなもの・嫌いなもの)」『近代文学』

3月1日、「風のひびき」『世界』

4月1日、「風のひびき(承前)」『世界』

4月1日、「はじめての散歩」『新女苑』

5月1日、「アンケート—チャタレイ裁判—」『新日本文学』

5月15日、「たましいの後遺症」『看護学雑誌』

6月、「印象深かった園遊会」『文芸家協会ニュース』

6月5日、「甘い料理反対」『あまカラ』

うか。私の記憶にほとんどこの大田洋子さんのことが残っていないのは、いつも気難しく、不機嫌なひとであったこと。幼いパシリである私に、たまにはお菓子をくれたり、笑顔を見せたり、優しい言葉をかけたりしてくれる人ではけつしてなかったからだ(ウェブ「百人社通信 しらさぎだより(46)隣に住んでいた作家」2025年4月4日閲覧)

大牟田稔(中国新聞記者)談

「52年、53年、54年が大田さんの一番派手な時期だったが、55年以降、原爆に呪縛されて書けなくなったのではないか。呪縛を振りほどこうとしてほかのものに手を広げたが、どうしても逃げられなかったのではないか。武田泰淳が言うところの『見てしまったもの』という感じがする。体験を持った人と持たない人との違いがある。原爆というとてもないもの、人間に対する深い傷を残し、子供に対する影響も大きく、外形的にはケロイドというものを残した。それに耐えていけるのかどうかということ。大田さんはそれに耐えられなくなったのではないか。この体験を背負った人の立場として、文学とどう切り結んでいくかということが問題。大田さんには女性としての生き方と、二つの問題がある。それが原や峠の立場と違う」(1970年8月7日)

女流文学者会、大田は前列右から二番目、1951年



1958 (昭和33)年 55歳

4月、佐多稲子を通じ「湿地帯」を『群像』に持ち込むが、テーマは面白いが整理が足りないと返却される。

11月4日、日本文芸家協会臨時総会が俳優座劇場で開催され出席する。

11月10日、新警職法反対の文芸大講演会が高円寺会館で開催され、安部公房らと講演。

この頃からか、中央線、西部新宿線沿線に住む女性作家たちが、回り持ちで、それぞれの家で手料理を作って集まるようになった。佐多稲子、壺井栄、芝木好子、大原富枝、畔柳二美、池田みち子、大田洋子。

7月20日、「受診証がふしぎでならない」『文芸・美術国民健康保険』

9月1日、「娘と息子たち」『新女苑』

10月1日、「名前のつかぬ私たちの会」『群像』

11月16日、「せめて深夜の音楽が」『東京新聞』

12月20日、「戦争は起きないという答え」『暮しの手帖』

1958 (昭和33)年

1月、「船旅のこと（新年に当り船員のご家庭へ）」『海員』

2月1日、「ノイローゼの克服」『婦人公論』

2月5日、「名もない『みのる』」『あまカラ』

4月20日、「おつきあい」『東京新聞』

5月1日、「私の温泉歴」『温泉』

7月1日、「華やかな危機（私の処女作時代）」『みどり』

7月9日、「湯の町の花火」『下野新聞』

7月27日、「中近東のニュースに注目」『朝日新聞』

8月9日、「行進―死者の魂への共感―」『図書新聞』

8月10日、「原爆被災者として訴える」『朝日新聞』

8月24日、「一家の中でさえ混乱」『朝日新聞』

原田春乃（友人談）

「大田さんと知り合ったのは輝夕会です。戦時中、長谷川時雨さんが右翼的になり、中国に慰問に行ったりしましたでしょ。わたしも歌をやっていたので、その思想に傾いた。大田さんは自分は作家だという気持しかなかったですね。作家は人間的にも豊かでないかならないと思うが、あの人は偏狭なところがあつたなあ。原爆に遭ってそれを書かなければということで書いたのはすばらしいし、時代を見る作家としての鋭敏な眼があつたらだろけれど野心家でしたからね。昭和30年に私が鷲宮に移ってからのつきあいで、お手伝いの菊込光枝さんは私が世話しました。何度も出ていくというのを止めたから、一番長くいました。何かあると呼ばれていつて文句を言われたり、いなくときに食事の世話をしたり。昭和27年から旧女人芸術の熱田優子さんや内田生枝さん、日下典子さんと『女人像』という雑誌を続けてます。大田さんに何度か原稿を頼んだけど、集りにはときどき来たけれど、一度も書いてくれませんでした。お金にならないからね」（1971年1月19日）

大田洋子「母の死」

「母と私は広島で、妹母子と同じ家で原爆にあつた。そのとき母は茶の間で、うしろから突風のように倒れかかって来た大きな茶だんすで後頭部を打った。母の死んだあと、私はそのことを思うの



原爆乙女の渡辺千恵子を囲んで。大田は後列左、1958年

1959 (昭和34)年 56歳
 10月2日、同居していた母トミ死去。享年84歳。前々日は映画を観て5時間も外出し、翌日も特売の商店に買い物に行き、夕食も普通に摂ったのち、脳溢血で逝く。
 12月、自宅療養のためとして壺井栄に家屋の登記済権利証を預けて七万円、畔柳二美から六万円を借りる。のち、返済をめぐって壺井と争いになる。
 この頃の仕事ぶりは、「夜、家族のものが寝しずまった10時ごろから夜半まで、30分間に1枚の割で10枚書く」（書齋拝見）。

8月24日、「原爆乙女と語る―渡辺千恵子さんかこむ座談会（渡辺千恵子・渡辺すが・木下澄子・佐多稲子・大田洋子）」『婦人民主新聞』
 9月1日、「慈善病院の後裔」『世界』
 9月7日、「私のきいた番組」『朝日新聞』
 10月1日、「病葉」『群像』
 10月1日、「夫婦さまざま」『郵政』
 11月1日、「赤の他人のことではない」『PEN』
 12月1日、「樹の姿」『婦人朝日』
 12月1日、「思い出すのもいやな記憶（新警職法についてのアンケート）」『新日本文学』
 12月5日、「バレエを見られる妃の姿」『産経新聞』
 12月、「僕のそばに一生いて」『それいゆ』
8月20日、「残醜点々」『現代日本文学全集88』筑摩書房
1959 (昭和34)年
 4月1・2・4日、「武田泰淳作『森と湖のまつり』（小説の女性像）」『北海道新聞』
 4月、「旅と食べもの」『食生活』
 5月5・6・9日、「室生犀星『杏っ子』（小説の女性像）」『北海道新聞』
 7月1日、「かわたれどき」『世界』
 7月1日、「花のうめき」『日本』
 8月9日、「大田洋子さん（書齋拝見）」『週刊読売』
 8月30日、「女のもつ傷と瑕―求人広告と未知の人からの手紙をめぐって―」『婦人民主新聞』

だ。この一〇年あまり、母は目まいがする。頭が悪いと言いいいた。どの医者も年だからといい、本人もそれで納得し、私もそう思ってしまう。血圧は一七〇程度で、それほど多いとも考えられなかったのに、脳には前々から少量ずつの出血があったのではないかと、という医師の見方に、私は心奮ざめる思いをする。

火葬場で骨をひろったときも、私は失神しかけたが、そんな状態のなかで、母の骨の全部を大学病院にでも持ってゆき、広島放射能がくつついていのかどうか、その有無を調べてもらいたい衝動にかられた。じっさいにはそこまで非情になれなかった。母が広島放射能の後遺症を持っていたかどうか、今となっては永久に不明のものとなった。けれども私としては思うのだ。もしそれがあっても、他の病名で死んでゆく人が、かならず、数多くいるのだということを（『朝日ジャーナル』1959年12月13日）

豊島輝子（修道女ぐずれ）の取材相手）の手紙

「もう十年も前になりますか。私が婦人朝日に手記を発表致しまして、しばらくして大田さんが訪ねて来られました、くわしく教会の内部の事を聞きたいと申されまして、カトリック教会で働いていまして神父様にひどい目に会いました、丁度その頃カトリックの神父の殺人事件が起こり教会の圧力で表面に出ないまま神父は日本を去り、他に



母トミと大田、1950年頃

1960 (昭和35)年 56歳

母トミの年金が無くなり、生活が逼迫する。

この年、「八十歳」、続けて「八十四歳」で老いた母の姿を容赦なく書き、老人問題をいち早く取り上げた先駆的作品と評価される。

1961 (昭和36)年 57歳

6月、熱海来宮の佐々木茂索の別荘で行われた女流文学者会総会に参加、箱根をまわって帰宅。

この年、壺井栄とのトラブルで手伝い人の菊込光枝が去り、大田が『赤旗』に求人旨を書いたところ、大田作品に親しんでいた鈴木安子が住み込む。鈴木は昼夜なく大田の要求にこたえ親身に尽くした。入院中もベッド脇に起臥して仕えたが、最後の1年は給料が支払われなかった。

9月1日、「ある一日 (三点鏡)」「二田文学」

9月、「放射能のおそろしさ」「食生活」

10月12日、「善福寺川」「週刊新潮」

10月15日、「修道女くずれ」「別冊小説新潮」

12月1日、「小さな人」「新日本文学」

12月13日、「母の死」「朝日ジャーナル」

1960 (昭和35)年

8月1日、「輾転の旅」「群像」

8月、「海と川」「暮しの窓」

8月6日、「その日の朝」「読売新聞」

8月8日、「十五年たつたというが……」共同通信社

10月1日、「八十歳」「世界」

9月15日、「半人間」『新選現代日本文学全集32』筑摩書房

1961 (昭和36)年

3月5日、「田舎生れだから」「あまカラ」

4月1日、「八十四歳」「群像」

4月1日、「春の魚 (季節の風物詩)」「郵政」

5月1日、「ゆく先きさき」「世界」

7月2日、「安らかに生きるために (私と宗教)」「読売新聞」

7月15日、「終車は出た」「小説中央公論」

10月1日、「ペンだけを忘れてくる」「風景」

8月10日、『八十歳』(八十歳・八十四歳・輾転の旅)「ゆく先きさき」講談社、B6判厚紙装函入、

下井草教会の信者さんでしたかローマに脱出された事件を取りあげて小説を書きたいから取材に協力してくれと申されましてお会いした次第です。小説新潮に書いています。(略)あの頃は生活苦と病気と小説が書けないため分アレていられました。夜は何か書いていられました。あの静かなお家は今誰が入っていられますでせうか(江刺昭子宛、1971年1月26日)

大田洋子「わが二つの会」

「文学的交友関係とむりにいおうとすると、この女流文学者会と、もう一つ、八、九人でそれぞれの家で手料理を作って集りあう『私たちの会』という、名なしの会みたいな集りとをあげるほかはない。『私たちの会』では食べたりしゃべったりし、花札を引く。この花札を引いてさわぐのを、外部にもらすことをいやがるひともいる。これを書く」と『絶交』されないと限らない。(略)佐多さんと私が掛合漫才みたいなことをひっきりなしにいう。テープレコーダーにとって売りたいくらいである。この集りの時くらいしん底バカのようになりたいたいからだ(『群像』1962年5月)

<p>1962 (昭和37)年 59歳</p> <p>6月、働きながら大学受験浪人をしている藤原と早稲田大学3年生の大川昭子(江刺)が下宿する。台所は共用。大川の下宿代は6000円。</p> <p>7月4日、『文芸』(河出書房)の編集者坂本一亀宛の手紙に、坂本の提案通りにすれば「あの手法は死ぬ」「あじわいというべきものは消え去る」と書き直し要求を拒否し、「可能な限り御意見を入れ短くもしたのに」と嘆いている。どんな原稿だったのかは不明。</p> <p>1963 (昭和38)年 60歳</p> <p>1月、『ミセス』編集部依頼で、小田仁二郎のインタビューを受ける。</p> <p>3月10日、4月27日、5月15日付の佐多稲子宛の手紙と葉書で、1959年に壺井栄から借りた金をめぐってトラブルになった事情を縷々説明し、佐多に仲裁を依頼している。3月の長文の手紙では寒さで「胃がいれんと頭のいれん」で弱っているとき、全額返したのに壺井は返してもらっていないという。あいだに手伝いの苅込光枝と壺井の娘婿の加藤が入っているためこじれた。</p>		
<p>1962 (昭和37)年</p> <p>2月1日、「恋責め」『群像』</p> <p>3月30日、『山上』(わが小説)『朝日新聞』</p> <p>5月1日、「わが二つの会」『群像』</p> <p>6月8日、「女性に席を！」『毎日新聞』</p> <p>7月1日、「悪人が家のなかまでやって来た」『文芸朝日』</p> <p>10月、「座談会 生死について考える」『婦人之友』</p> <p>10月25日、64年2月27日、「なぜその女は流転するか」『新婦人しんぶん』</p> <p>7月15日、「山上」『わが小説』雪華社</p> <p>1963 (昭和38)年</p> <p>1月30・31日「懸賞小説に当選のころ(上下)」『朝日新聞』</p> <p>5月1日、「ベルリンの大学生の手紙」『風景』</p> <p>6月1日、「隅」『世界』</p> <p>6月1日、「白蟻」『自由』</p> <p>6月15日、「広島雨(ふるさとめぐり)」『読売新聞』</p> <p>8月4日、「広島県(日本のおんな)」『朝日新聞』</p> <p>8月7日、小田仁二郎「話題の名作紹介」『人間檻』</p> <p>『大田洋子』『ミセス』</p>	<p>300円</p> <p>12月25日、「八十歳」『文学選集26』講談社</p>	
<p>大田洋子「病院生活」</p> <p>「六ヶ月近い入院では、文芸・美術の健康保険があったので相当に気らくであった。ところがどうも気にくわぬところもあった。どこの病院にも三千円もする一人だけの個室があったし、病人なら一人部屋に限ったことはないけれども、ここに入る人は数すくない。</p> <p>健康保険だけでいようとすると、五人から十人の相部屋となる。そこでは特別薬は使ってくれないから、だからと入院しているほかはない。制限治療というのは困ったものだと思う。誰にでも千三百円の二人部屋くらいには入ることができ、特別薬をふんだんに使って、医師の思うとおりに病気がなおせるようにならないと病院はいつも満員の盛況である」(『文芸家協会ニュース』1963年12月)</p> <p>新婦人しんぶん編集部「創作に生きた女性 大田洋子さんをしのんで」</p> <p>「出発の九日は寒い朝でしたが上野駅の大田さんは上ぎげんでした。郡山から先の汽車は寒かったそうです。たぶん、すこしむりだったのでしょう。それにしても大田さんが、ちっとも不きげんなようすをみせず、思いやりさえあった、とは同行の、さしえをかいて下さっている久米さんの話です。大田さんはよく「気むずかしい」文句が多い」といわれました。しかしそれは明らかに大田さん</p>		

壺井が随筆「今日このごろ」(『小説中央公論』1963年4月)で大田を非難したとして、自己の正当性を訴えている。壺井が自宅に来てののしられたこと、モスコー劇場での芝居観覧の切符代も返してもらってないと詰めよられた、「一日々々と私のいかりと壺井氏への軽蔑が深まる許りです」。壺井は、大田没後の随筆「今は亡き人たち」(『群像』1966年10月)でも大田を非難している。

6月9日、十二指腸潰瘍と胆管結石の疑いで東京女子医大病院内科に入院。9人部屋で庶民の生活がわかると思っていたが、佐多稲子らが見舞いに来て作家だとわかり2人部屋に移る。つらい検査を耐えて胆石は出たらしく、聖路加病院内科、さらに神経科専門の晴和病院へ転院。晴和病院に移るとき精神病と間違われるのがいやで変名で入院し、知人らには東大病院と伝えたため「行方不明」と騒ぎになる。

11月10日、退院。「長い入院生活をしたからには、以前より丈夫になって帰るのがあたりまえの話だが、自分ながら人が変わったかと思うほど、朝はやく起きて、寝ながらでなく起きて本など読んでいる」(『病院生活』)。電話を取りつけ、知人らに嬉しそうに電話をかけていた。

12月9日、連載中の「なぜその女は流転するか」のモデルに会うため福島県猪苗代に旅立つ。鈴木安子と画家の久米宏一が同行。

12月10日、中の沢温泉の五葉荘に宿泊、入浴中に

9月15日、「病床に思う―作家であるための悲喜劇―」『朝日新聞』

12月1日、「高田に行ったときのこと」『資源』

12月、「病院生活」『文芸家協会ニュース』



『ミセス』1963年8月



小田仁二郎のインタビューを受ける。1963年1月

の不健康、とくに被爆者というところに原因があったと思います。夏でも冷える、どこそこが痛むなど年中こぼされました。しかし、自己は主張しても、人のことがみえない人ではなかった。げんに小説のことで接触した私たち編集部員にたいしても、あいそを忘れなかったし、ムリを言う、と思うようなこともありませんでした。むしろ入院中、腹部の痛みをおして書きつづられたその「仕事熱心」にはうたれました。半年の入院中、小説を休んだのは一ヶ月余ですから(阿部ちとせ「創作に生きた女性 大田洋子さんをしのんで」『新婦人しんぶん』1963年12月19日)

芝木好子「鎮魂 大田洋子」

「大田家のお手伝いさんは」どのひとも、神経質でかよわい大田さんに献身的で、そこに人の心をとらえるなにかがあったのだろう。一方、大田さんの人使いが荒いといって法務局へ訴えたお手伝いもいたが、その話をほかならぬ大田さんがするので、挨拶のしようもなかった。大田さんは家政婦やお手伝いを高給で雇わなければならぬのに、それに見合う収入のない自分の不遇が腹立たしいのだった。世の中は不合理で、愚にもつかない小説を書いている人が流行作家で、良い仕事をしている自分がむくわれぬという不満を抱きつづけていた。

それは無理からぬことだった。終戦後の歳月が

急死。心臓麻痺と診断される。下宿人の藤原が福島に急行し、鈴木、『新婦人しんぶん』記者とともに11日遺体で帰宅。戸籍簿には「昭和38年12月10日午後5時40分福島県耶麻郡猪苗代町大字蚕養沼尻山里二八五番地で死亡。その地の同居者鈴木安子届出 同月12日猪苗代町長受付 同月25日送付除籍」とある。享年60歳。

12日、通夜。
13日、午後1時から東京・中野区の自宅で告別式。親族のほか、女流文学者会の円地文子、網野菊、佐多稲子、壺井栄、畔柳二美、池田みち子、大原富枝、中本たか子、広池秋子ら女性作家、阿部知二、丹羽文雄（代理）、丸木俊子、いわさき・ちひろら約40人が列席。共産党からは豊田四郎中央委員候補が参列。円地文子、新日本婦人の会代表委員の榎田ふきが弔辞を読んだ。各新聞が訃報を伝えたが、大田自身が偽りの年齢を公表していたことから、各新聞の訃報欄では56歳、57歳と報じられ、本名・稲井洋子と伝えた新聞もあった。
初七日を済ませて親族は引き揚げ鈴木安子と下宿人の大川昭子が64年3月まで住んだ。十四日、三十五日、四十九日に南隣の西岡由希子、『女人芸術』時代からの友人の松下文子、原田春乃、前の手伝い人の菊込光枝らが集って大田を偲んだ。
お骨は、一時的に広島市白島町電停際の萬行寺に納められる。このあと、広島県佐伯郡佐伯町玖島の正善寺の母トミの墓に埋葬。



鷺宮の家の正面玄関あたり



書斎兼居間



弔辞を読む円地文子

流れても、原爆症の苦痛を背負いつづけて神経性の病気にさいなまれてゆく彼女は、その中で『屍の街』『人間檻樓』『半人間』などのすぐれた作を書きながら、充分の評価や支持を受けているとは限らなかった。彼女の高飛車な態度が人間関係でマインスをよんだとしても、たいしては原爆作家で片付けられた。人から報いてもらえない性は一層苛立って、孤独なだけ意固地にしていったのだろう。『風景』1972年9月)

円地文子「大田洋子さんのこと」

「大田さんには若い時美貌と才能に恵まれて寵遇された甘えが、鼻っばりの強さからみついていて、トゲのある花のような印象を他人に与えたことも多かったようだ。しかし、シンはやさしい、いい人だった。大田さんから電話がかかって来た時の少しかすれた、甘えの交じっている声が、今も私の耳には残っている。電話は大部分原稿の発表についてのことだった。大田さんは死ぬまで小説を書き、それが人に読まれることを願っていた。」（『朝日新聞』1963年12月12日）

没後刊行された著書・文学選集・再録・復刻類

- ・「世に迷う―ふしぎな弟と私」『世界』一九六四年二月一日
- ・「松沢百恵先生の犯罪」『別冊小説新潮』一九六四年四月十五日
- ・「人間檻樓抄」『昭和戦争文学全集13』集英社、一九六五年
- ・「屍の街抄」『日本現代文学全集106（現代名作選2）』講談社、一九六九年六月
- ・「屍の街抄」『作品集（八月六日）を描く』文化評論出版、一九七〇年六月
- ・「屍の街」（潮文庫）潮出版社、一九七二年七月
- ・「冬」『新日本文学』一九七八年二月
- ・「半人間」『現代の女流文学6（女流文学者会編）』毎日新聞社、一九七五年一月
- ・「夕風の街と人と」三二書房、一九七八年七月
- ・「大田洋子集」全四巻、三二書房、一九八二年七月〜一〇月
- ・「日本の原爆文学② 大田洋子」ほるぷ出版、一九八三年八月
- ・「屍の街」講談社文芸文庫、一九九五年
- ・「屍の街」『コレクション戦争と文学19 ヒロシマ・ナガサキ』集英社、二〇一二年六月
- ・「桜の国」（復刻）『近代女性作家精選集42』ゆまに書房、二〇〇〇年二月
- ・「淡粧」（復刻）『戦時下の女性文学6』ゆまに書房、二〇〇二年五月
- ・「たたかひの娘」（復刻）『戦時下の女性文学11』ゆまに書房、二〇〇二年五月
- ・「過去」『短篇 女性文学近代 続』桜楓社、二〇〇二年九月
- ・「戦後の出発と女性文学」（3巻「牢獄の詩」「不知世」・4巻「積みかさなる誤り」・6巻「過去」・8巻「山上」・9巻「半人間」・15巻「真昼の情熱」）ゆまに書房、二〇〇三年五月
- ・「屍の街」平和文庫、二〇一〇年七月
- ・「屍の街」『新編 日本女性文学集 7』ゆまに書房、二〇一八年二月
- ・「屍の街 大田洋子 原爆作品集」小島遊書房、二〇二〇年八月
- ・「人間檻樓・夕風の街と人と 大田洋子 原爆作品集」小島遊書房、二〇二二年八月
- ・「新版 大田洋子 原爆作品集 屍の街他11編」小島遊書房、二〇二四年八月
- ・「検束のある小説」『プロレタリア文学セレクション』（平凡社ライブラリー）平凡社、二〇二五年三月
- ・「屍の街・夕風の街と人と」（岩波文庫）岩波書店、二〇二五年七月

年譜作成に使用した主な資料

- ・江刺昭子『草履 評伝大田洋子』講書房、一九七二年（大月書店で再刊、一九八二年）
- ・浦西和彦「大田洋子年譜」『大田洋子集』第四巻、三二書房、一九八二年
- ・「大田洋子 被爆作家の軌跡 その1」『中国新聞』一九八三年七月五日〜八月二二日
- ・広島に文学館を！市民の会編集・発行『大田洋子を語る 夕風の街から』二〇〇七年
- ・広島市立図書館 広島文学資料・大田洋子目録

あとがき

2024年8月15日、私共が毎年8月15日に開催している「原爆・反戦詩を朗読する市民の集い」を、国際シンポジウムとし、「原爆文学の今を考える」のテーマで開催した。その中で、江刺昭子さんは、「今こそ、大田文学の拡散を」と強く訴えられた。その後、岩波文庫から大田洋子の作品集を出版する話が進み、2025年7月に『屍の街・夕風の街と人と』が初めて、588ページもの分厚い文庫本として出版され手に取り読みやすくなった。江刺さんはそれと共に、大田洋子の戦前、戦後の膨大な年譜作成に着手された。

江刺昭子さんと大田洋子の出会いは68年も前である。1957年の秋、高校の文化祭で「郷土作家の横顔」の展示をするため、大田の妹・中川一枝さんに話を聞きに行ったことから始まっている。その後大学3年生の時、大田家の下宿人として、大田洋子の急死に遭遇した。若い江刺さんに強い影響を与え、作家としてのデビュー作と言える『草鱧 評伝大田洋子』の出版につながった。

江刺さんはノンフィクション作家として多くの作品も書かれているが、「大田洋子はいわば私の最初と最後の仕事かもしれない」と言われ、今まで注目されなかった「大田洋子年譜」に力を注がれた。年譜と言えば多くは、履歴、著書、文学選集・再録類、初出作品目録などであるが、今回は更に貴重な内容が加えられている。3段目に掲載の、著作及び、他の作家や評論家の評言や感想、新聞雑誌記事の抜粋、『草鱧』執筆時に聞いた関係者の談話、問い合わせ手紙類の抜粋などである。年譜であってそれだけではない、特異な年譜なので小冊子として発行することとした。江刺さんは、これを基としてさらに詳細な年譜が編まれることも望んでおられる。

大田洋子の生涯と作家活動が一望できる年譜として、大田洋子研究を深めるための文献となれば幸いです。
(土屋時子)

大田洋子 年譜 (著・江刺昭子)

壮絶な葛藤の中 綴った原爆文学を辿る

2025年12月7日 発行

発行人・広島文学資料保全の会

〒730-0802

広島市中区本川2丁目1-29-301

TEL/FAX 082-291-7615

Eメール qqxn4he9k@cap.ocn.ne.jp

頒価 700円 (とき印刷300)

